中　南　部（6）

－ 桧原遺跡群第５次調査、曰佐遺跡群第２次調査、
警弥郷Ｂ遺跡群第４次調査報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第679集

２００１

福岡市教育委員会

中　南　部（6）

－ 桧原遺跡群第５次調査、曰佐遺跡群第２次調査、
警弥郷Ｂ遺跡群第４次調査報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第679集

２００１

福岡市教育委員会

序　文

玄界灘に面し、はるかアジア大陸をのぞむ福岡市は、古くから中国ならびに朝鮮半島との海外交流の窓口として栄えてきました。

福岡市では、市内に分布する多くの文化財の保護、活用に努めていますが、近年の開発事業に伴い、やむを得ず失われてゆく埋蔵文化財については、記録保存のための発掘調査を実施しています。

本書は福岡市南区において実施された桧原遺跡群第５次調査、曰佐遺跡群第２次調査、警弥郷Ｂ遺跡群第４次調査の発掘調査報告書です。

本書が文化財保護の理解を深める一助となり、併せて研究資料として活用いただければ幸いです。最後になりましたが、発掘調査費用の負担をはじめとするご協力を賜りましたヤマエ久野株式会社、立川圭一氏、新飼秀朝氏をはじめとする関係各位に、心から感謝申しあげます。

平成13年３月30日

福岡市教育委員会

教育長　生田征生

例　言

1．本書は平成11年度に行われた民間開発に伴い、福岡市教育委員会が実施した、桧原遺跡群第５次調査、曰佐遺跡群第２次調査、警弥郷Ｂ遺跡群第４次調査の報告書である。各調査の担当は、桧原が上角智希、曰佐が本田浩二郎・上角、警弥郷Ｂが榎本義嗣・阿部泰之である。

2．本書で使用した遺構および遺物の実測、製図、写真撮影は、各調査担当者が整理作業に携わったみなさんの協力を得ておこなった。

3．本書使用の方位はすべて磁北である。

4．本書に係る遺物・図面・写真は、すべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

5．本書の執筆は序章、第３章を阿部、第１章、第２章を上角が担当し、編集は上角がおこなった。

本 文 目 次

序　章　各遺跡の位置の環境……1
第Ⅰ章　桧原遺跡群第5次調査……3
一．はじめに……5
二．調査の記録……6
三．小結……14
第Ⅱ章　曰佐遺跡群第2次調査……21
一．はじめに……23
二．調査の記録……24
三．小結……35
第Ⅲ章　警弥郷Ｂ遺跡群第4次調査……41
一．はじめに……43
二．調査の記録……46
三．小結……50

挿 図 目 次

桧原遺跡群第5次調査

第1図　調査区の位置（1/2000）……6
第2図　遺構配置図（1/125）……7
第3図　SB01、04出土土器（1/3）……8
第4図　SB01、02掘立柱建物実測図（1/40）……9
第5図　SB03、04掘立柱建物実測図（1/40）……10
第6図　SB05掘立柱建物、SA06柵列実測図（1/60）……11
第7図　SK07土壙実測図（1/20）……12
第8図　SK07出土土器（1/3）……12
第9図　その他の出土遺物（1/3、1/1）……13
第10図　試掘調査出土の旧石器（2/3）……13

曰佐遺跡群第2次調査

第1図　調査区の位置（1/4000）……24
第2図　遺構配置図（1/300）……25
第3図　SK01土壙実測図（1/30）……26
第4図　SK01出土土器（1/3）……26
第5図　SK02土壙実測図（1/30）……27
第6図　SK02出土土器（1/3）……27
第7図　SK03、07土壙実測図（1/30）……28
第8図　SK03、07、SD04出土土器（1/3）……29
第9図　SB08、17掘立柱建物、SA18柵列実測図（1/80）……31

第10図　縄文土器（1/3）……32
第11図　縄文時代包含層土層断面図（平面図1/400、土層図1/100）……34
第12図　第１次調査との合成図（1/600）……35

警弥郷Ｂ遺跡群第４次調査

第１図　調査地点位置図（1/25000）……44
第２図　調査区位置図（1/2500）……45
第３図　調査区全体図（1/200）……46
第４図　調査区グリッド位置図（1/200）……46
第５図　Ｃ－16グリッド実測図（1/40）……47
第６図　グリッド出土遺物実測図（1/3）……47
第７図　SB010実測図（1/60）……48
第８図　SB040実測図（1/60）……49
第９図　調査区出土土坑実測図（1/40）……49
第10図　土坑出土遺物実測図（1/3）……50

表・図版目次

桧原遺跡群第５次調査

第１表　桧原遺跡群第５次調査遺物観察表
第２表　桧原遺跡群第５次調査遺構観察表
PL.１　調査区全景（南から）
PL.２　調査区北半（北東から）
PL.３　調査区北半（南から）
PL.４　旧石器を探す
PL.５　出土遺物

曰佐遺跡群第２次調査

第１表　曰佐遺跡群第２次調査遺物観察表
第２表　曰佐遺跡群第２次調査遺構観察表
PL.１　調査区全景（西から）
PL.２　SK01土壙（西から）
PL.３　SK02土壙（南から）
PL.４　屋敷（西から）
PL.５　縄文時代包含層の調査（東から）
PL.６　出土遺物①
PL.７　出土遺物②

警弥郷Ｂ遺跡群第４次調査

PL.１　調査区全景　（西から）
PL.２　SB010（西から）
PL.３　SB040（西から）
PL.４　SK03遺物出土状況（東から）
PL.５　SK04（南から）
PL.６　SK05（北から）
PL.７　SK07（南から）
PL.８　Ｄ－13グリッド遺物・遺構検出状況（北から）
PL.９　Ｃ－16・17グリッド（南から）
PL.10　Ｃ－16・17グリッド土器出土状況（南から）
PL.11　Ｃ－16・17グリッド石斧出土状況（南から）
PL.12　出土遺物（1/3）

序章　遺跡の位置と環境

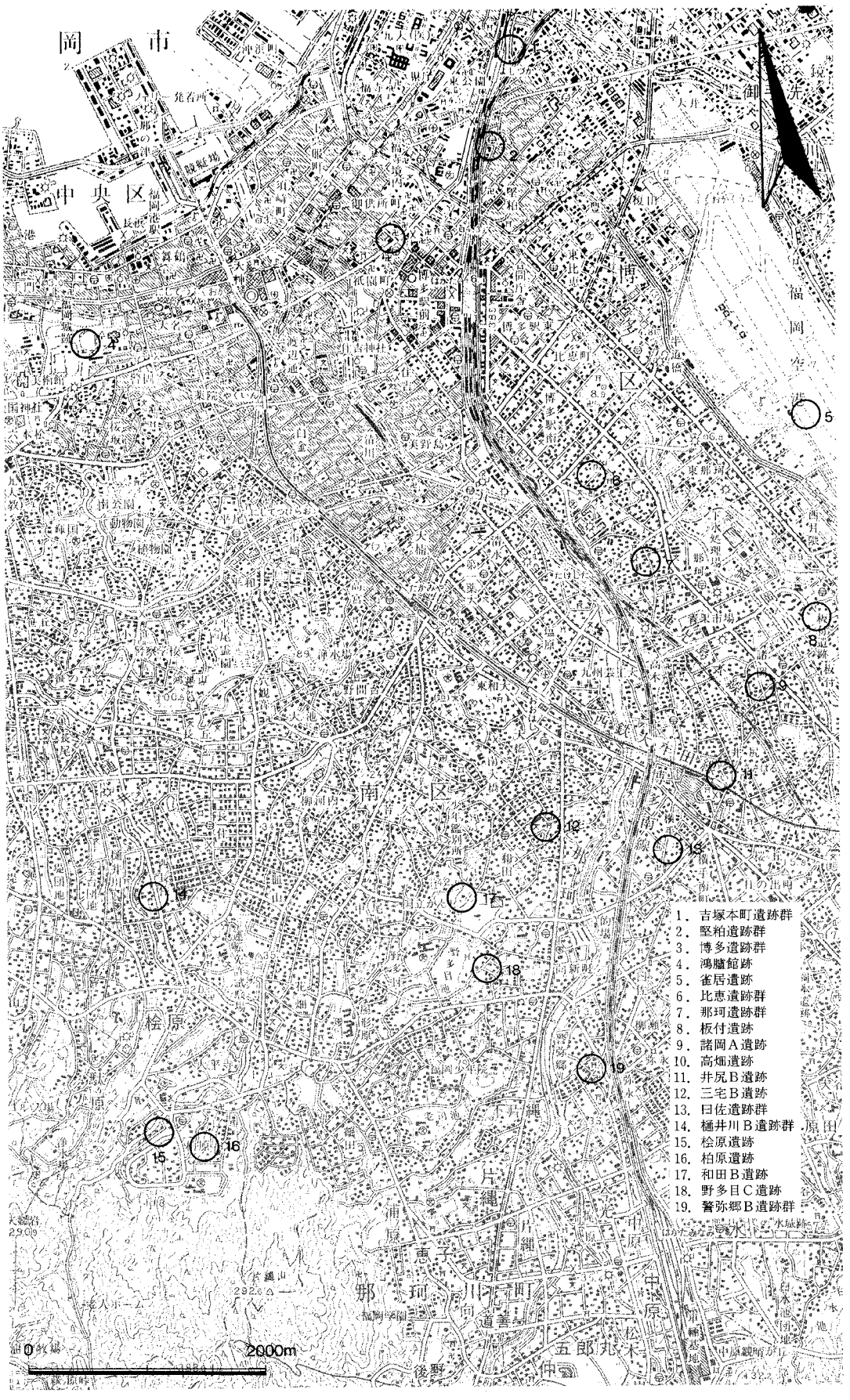
本報告書に所収されている桧原・曰佐・警弥郷の各遺跡は、福岡平野南部、南北に貫流する那珂川・樋井川に挟まれた東西５km・南北３kmの地域に所在する。現在はいずれの遺跡も福岡市南区に属するが、各遺跡の立地はそれぞれ異なるため、遺跡ごとに立地と環境を概観する。

桧原遺跡群は、樋井川の１支流である桧原川によって油山北麓に開析された谷部に立地する。谷底に形成された沖積地は狭長であるが、谷頭部で行われた第１次・第２次調査では、古墳時代中～後期にかけての遺物が出土しており、特記される遺物として木製品がある。農耕具を含み、部分的に火を受けて炭化している個体があることから、潅漑に関わる祭祀遺構の可能性が指摘されている。谷部右岸に面する丘陵端部には桧原古墳群が所在する。比較的大型の古墳を中心に小型の古墳が少数分布する形態で、下部の沖積地にまで古墳が分布する可能性が指摘されている。第３次調査において初めて調査の手が入れられた。横穴式石室を内部主体とし、TK209並行期の須恵器が出土している。そのほか、丘陵部には弥生～古墳時代後期の集落が形成されており、今回報告する第５次調査は第１次調査区の隣地に当たり、沖積地と丘陵部の境目付近である。

曰佐遺跡群は、那珂川中流域右岸、標高約60～10mを測る沖積微高地上に位置し、那珂川の中位段丘にあたる。遺跡は五十川川を西限とし、東には春日丘陵が位置する。今回報告する第２次調査は遺跡群の中央部、第１次調査の隣地に当たる。

第１次調査では、中世初期の掘立柱建物・溝・土坑が検出されている。溝は東西及び南北方向に掘削され、掘立柱建物が南北溝に沿って建てられている。土坑墓も検出されており、農村集落の可能性が指摘されている。また、曰佐・警弥郷周辺の沖積地では、古代～中世の遺構面（黄褐色シルト質土）が縄文後期～終末期の遺物包含層となっており、第１次調査では後期の西平式系土器・土錘・黒曜石製削器、終末期の突帯文土器・石鏃・磨製・打製各石斧・石製穂摘具、またローリングを受けているが、前期の曽畑式土器・中期の並木式土器・阿高式土器が出土した。特記されるものとして家を描いたと思われる線刻礫が出土している。第３次調査（未報告）では、12世紀～15世紀にかけての土坑・溝・掘立柱建物が検出され、土坑は12～14世紀の範疇に、溝は古墳時代後期・14世紀～15世紀に属するが、掘立柱建物は12世紀前半のもので、その他の遺構とは併存しない。遺物は白磁椀Ⅳ・Ⅴ類、土師皿・瓦器椀・龍泉窯系青磁・福州系合子・明代染付等が出土している。特記すべき遺物として溝SD20から複葉複弁の蓮華文を持つ軒丸瓦・偏行唐草文の軒平瓦が各１点出土している。遺構面である黄褐色シルト質土からは後期中葉の鐘ヶ崎系鉢形土器・磨製・打製各石斧・黒曜石縦長剥片・スクレイパー・打製石鏃が出土したほか、遺構検出面上にて地床炉を検出している。周囲の遺物から縄文後期の所産と考えられ、曰佐遺跡群では初の縄文時代に属する遺構である。

警弥郷Ｂ遺跡は、曰佐遺跡群同様那珂川の中流域にひろがる沖積地に立地し、西には弥生時代後期の環溝集落や墓地が検出された弥永遺跡が所在する。1970年に古式土師器・滑石製模造鏡が採集されており、現在に至るまで４回の調査が行われている。第２次調査では中世後期の水田、その下層から弥生時代前期末に相当する水田址が検出され、板付Ⅱ式・城ノ越・須玖式土器が出土している。第３次調査では、竪穴住居・掘立柱建物・溝等が検出され、弥生時代後期～古墳時代中期に至る集落とされる。特記される遺物として古墳時代前期の手焙形土器が出土している。本報告書では第４次調査について報告する。



第１図　各遺跡群位置図（1/5000）

桧原遺跡群第５次調査

遺跡略号　HBR－５
調査番号　９９４３

例　言

1．本書は南区桧原７丁目707－1、－4における共同住宅建築に伴い、福岡市教育委員会が平成11年10月７日から同年10月27日にかけて実施した桧原遺跡群第５次調査の報告書である。
2．遺構番号は通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付している。遺構略号は柵列がSA、掘立柱建物がSB、土壙がSK、柱穴がSPである。
3．遺構および遺物の実測は上角智希のほか、試掘調査出土の旧石器について杉山富雄がおこなった。
4．製図は上角、久家春美、旧石器については杉山がおこない、拓本は宮坂環がおこなった。
5．遺構写真撮影は上角が、遺物写真撮影は柳智子がおこなった。
6．本書使用の方位はすべて磁北である。
7．本書にかかる遺物・図面・写真は、すべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
8．本書の執筆は上角がおこなった。

一．はじめに

1．調査にいたる経緯

平成11年７月29日、大神千里氏より福岡市南区桧原７丁目707－１、－４における工事に先立って、埋蔵文化財事前審査申請書が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、申請地が桧原遺跡群北側隣接地にあたることから、埋蔵文化財包蔵地の可能性があると判断し、同年８月12日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表下20cmでローム層にあたり、多数の柱穴を検出、古代の土器および旧石器１点が出土したために、本調査が必要と判断した。

埋蔵文化財課では、調査委託者であるヤマエ久野株式会社と協議をおこない、開発面積1695㎡のうち、建物建築により遺構が破壊される252㎡について本調査を実施することで合意した。

本調査は平成11年10月７日から同年10月27日にかけておこなった。

2．調査組織

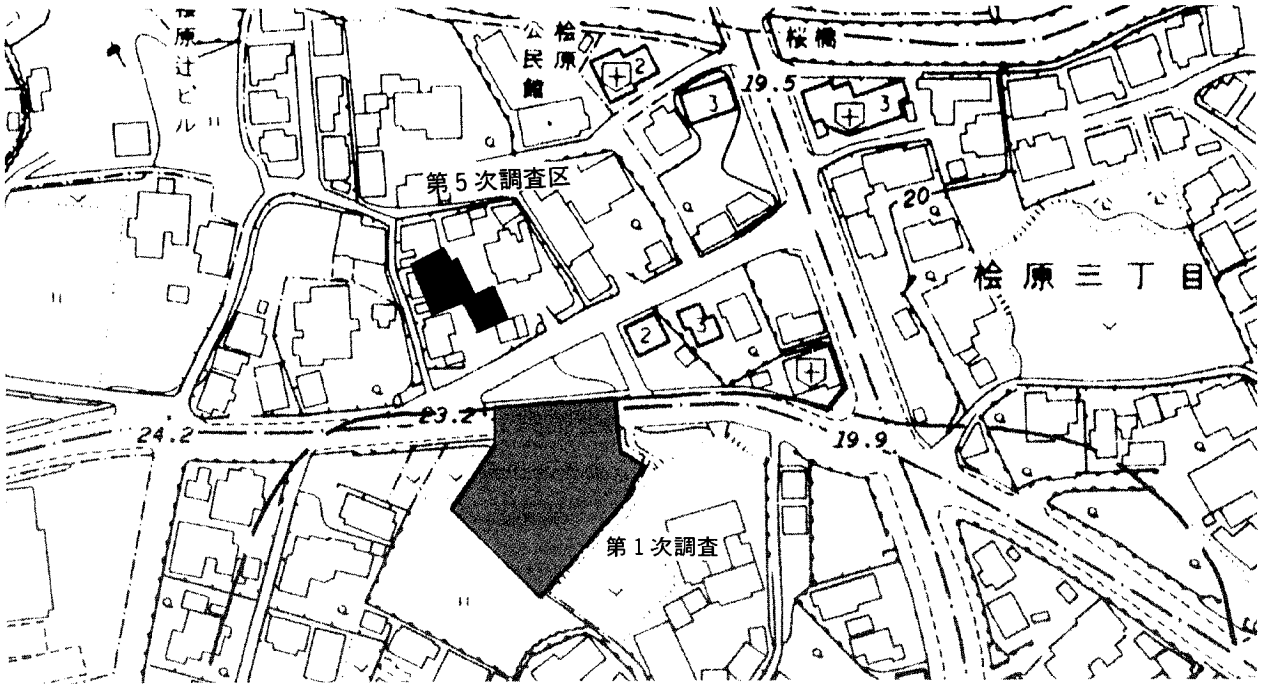
調査は以下の組織でおこなった。

調査委託　ヤマエ久野株式会社　代表取締役　濱本正人
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　西憲一郎（前任）　生田征生（現任）
調査総括　文化財部長　柳田純孝
　　埋蔵文化財課長　山崎純男
　　埋蔵文化財第２係長　力武卓治
調査庶務　谷口真由美（前任）　御手洗清（現任）
試掘担当　宮井善朗、中村啓太郎
調査担当　上角智希
調査作業　金子由利子、指山歌子、柴田勝子、柴田春代、長野嘉一、平井和子、
　　峯不二夫、門司弘子、堀川ヒロ子、萬スミヨ
整理作業　宮坂環、平川めぐみ、久家春美

3．位置と環境

桧原遺跡群全体の位置と環境については序章を参照していただきたい。本調査地点は桧原遺跡群北側の隣地であり、道路をはさんで南側の地点では1984年に第１次調査がおこなわれ（報告書未刊行）、古墳時代中～後期の低湿地を検出し、農工具を含む多くの木製品が出土している。現在の地形環境は標高約23mを測り、南には標高50mの丘陵がせまり、すぐ北には樋井川が流れる。調査地点から東へむかって地形は徐々に低くなり、100m東の桧原四つ角交差点の標高は約20mである。調査に入る以前は平屋の賃貸住宅がならぶ宅地であった。

遺跡名	桧原遺跡群　第５次調査			調査番号	９９４３
所在地	福岡市南区桧原7丁目７０７－1、－4			調査略号	HBR－５
開発面積	1695㎡	調査面積	252㎡	調査期間	1999年10／７～10／27



第1図　調査区の位置（1/2000）

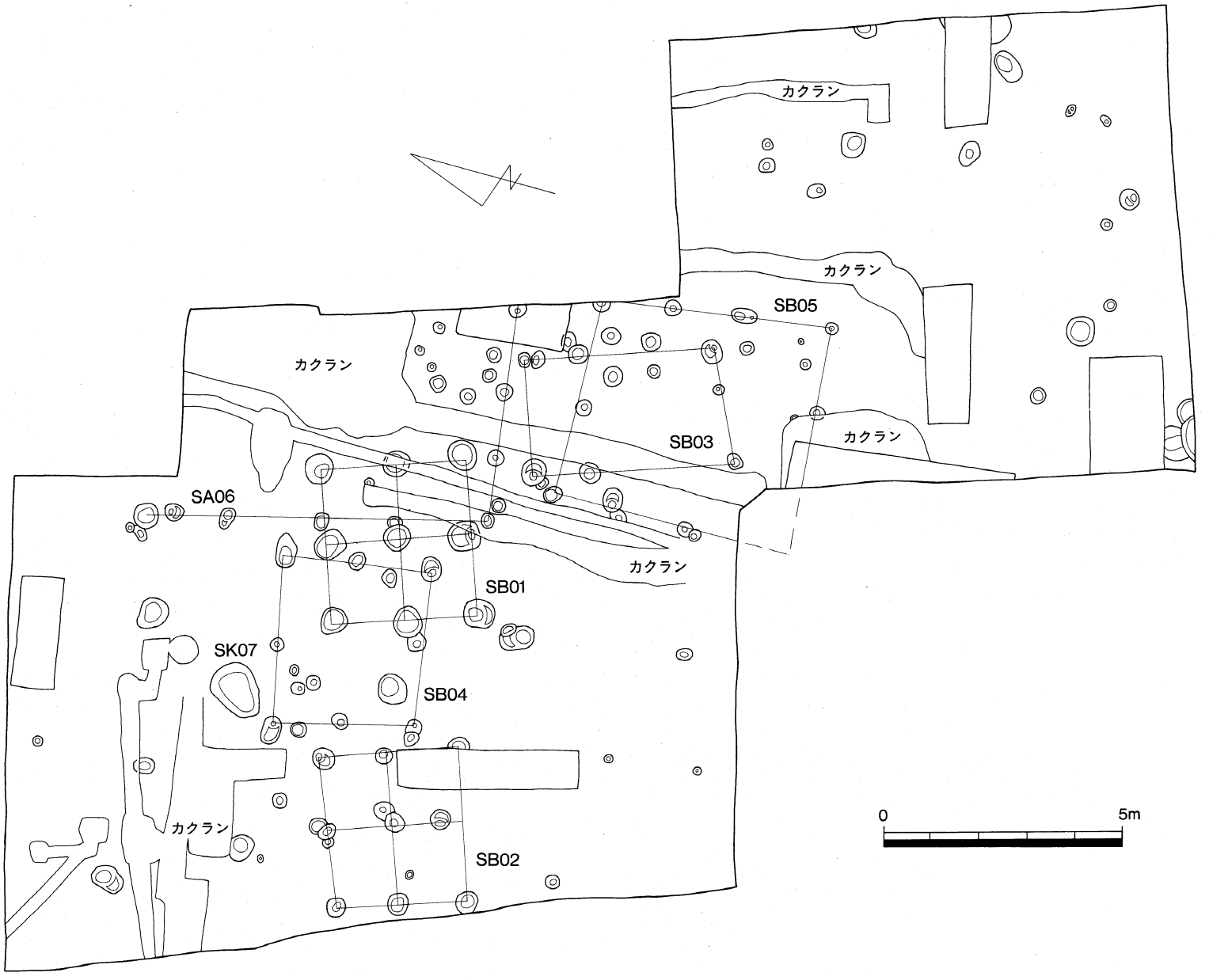
二．調査の記録

1．調査の概要

今回の調査は平成11年10月7日から同年10月27日にかけて実施した。調査区は2つの長方形が斜めに接した形状をなし、面積は252㎡である（第2図）。本書では北西側の長方形部分を調査区北半、南東側の方形部分を調査区南半と呼ぶことにする。遺構面は地表下30～40cm、標高約23mの高さで検出した。地山の土質は、北半が赤褐色主体で一部黄褐色が混じる鳥栖ローム、南半が褐灰色～灰白色の粗砂層で、その間に帯状に灰白色粘質土の箇所がある。トレンチを入れて地山の層序を確認したところ、鳥栖ローム→灰白色粘質土→粗砂層という層序をなす。

調査の結果、古墳時代中～後期の柱穴多数と土壙底部状の浅い掘り込み1基を検出し、調査区北半において掘立柱建物5棟、L字型の柵列1が復元できた。遺構は調査区全面にわたって検出され、とくに北半に密に分布する。土壙等の浅い遺構が少ないこと、遺構面上に遺物包含層が形成されていないことから、おそらく鳥栖ローム層の北半側を中心に、旧地形はかなりの削平を受けているものと推測する。遺構埋土は調査区北半の鳥栖ローム部分が黒褐色土、南半の粗砂層部分が黒褐色～暗灰褐色で粗砂を多く包含するシルトである。調査区北半には、平屋住宅群の下水管等の攪乱が多く存在する。遺物の出土量はコンテナ7箱である。

試掘調査において旧石器1点が出土したので、古墳時代遺構面の調査終了後、鳥栖ローム部分において1×1メートルの坪掘りを4箇所でおこなったが、旧石器は出土しなかった。



第２図　遺構配置図（1/125）

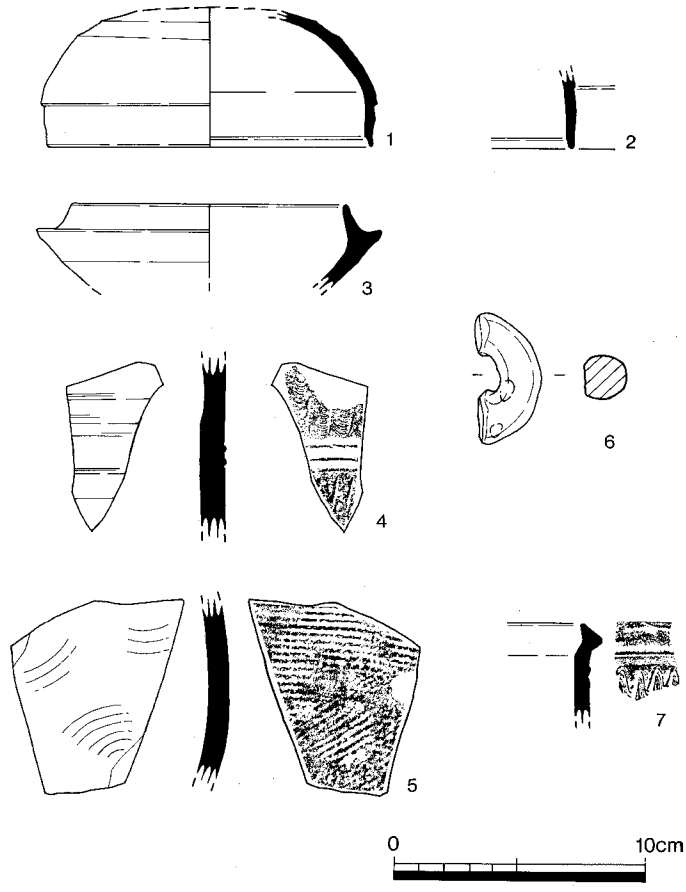
2．遺構と遺物

SB01掘立柱建物（第4図）

調査区北半の中央に位置する2間×2間の総柱建物である。建物の主軸方向は磁北より18°西にずれ（N－18°－W）、南北3.03m、東西3.36mを測る。

出土遺物（第3図1～6）

1～5は須恵器である。**1**は坏蓋で復元口径13.0cm、器高5.6cmを測る。**2**は坏蓋の口縁部片。**3**は坏で復元口径11.0cmである。**4**は器台の脚部片で、外面に波状文を施す。**5**は甕の破片。焼成不良で軟質、灰白色を呈する。外面に平行線状のタタキ痕、内面にうすく同心円状の当て具痕が残る。**6**は土師器の把手である。ほかに土師器坏等の小片が出土した。



第3図　SB01、04掘立柱建物出土土器（1/3）
1～6：SB01、7：SB04

SB02掘立柱建物（第4図）

調査区北半の西端に位置する2間×2間の総柱建物である。建物の主軸方向は磁北より17°西にずれ（N－17°－W）、南北2.85m、東西3.12mを測る。

SB03掘立柱建物（第5図）

調査区中央のくびれ部分に位置する1間×3間の掘立柱建物である。建物の主軸方向は磁北より17°西にずれ（N－17°－W）、梁間2.43m、桁行4.20mを測る。

SB04掘立柱建物（第5図）

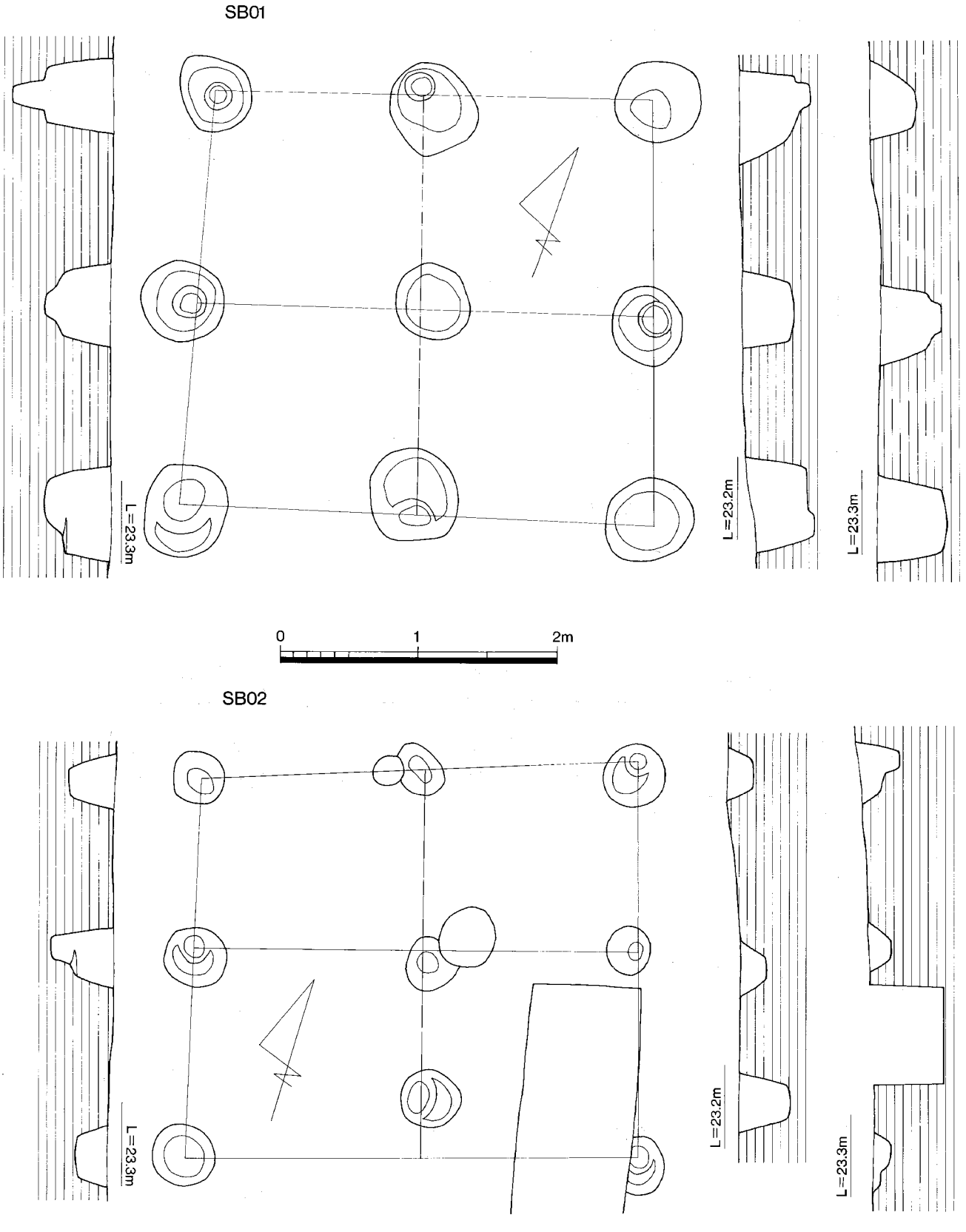
調査区北半のほぼ中央に位置する2間×2間の側柱建物である。建物の主軸方向は磁北より7°西にずれ（N－7°－W）、南北2.98m、東西3.41mを測る。柱穴の切り合い関係よりSB01よりSB04が古い。

出土遺物（第3図7）

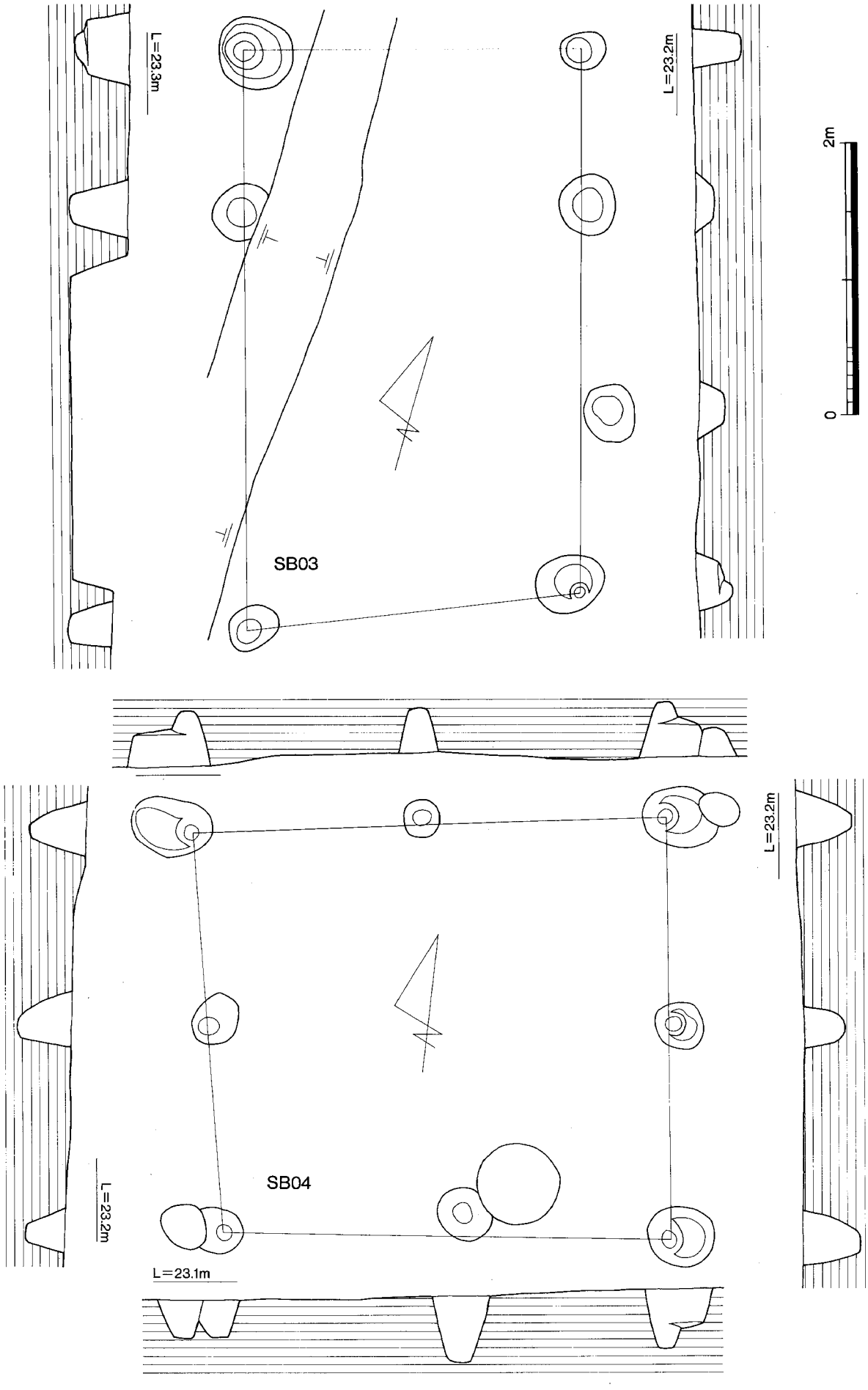
7は須恵器で器台の口縁部片か。口縁端はくの字状に屈曲し、外面に波状文を施す。

SB05掘立柱建物（第6図）

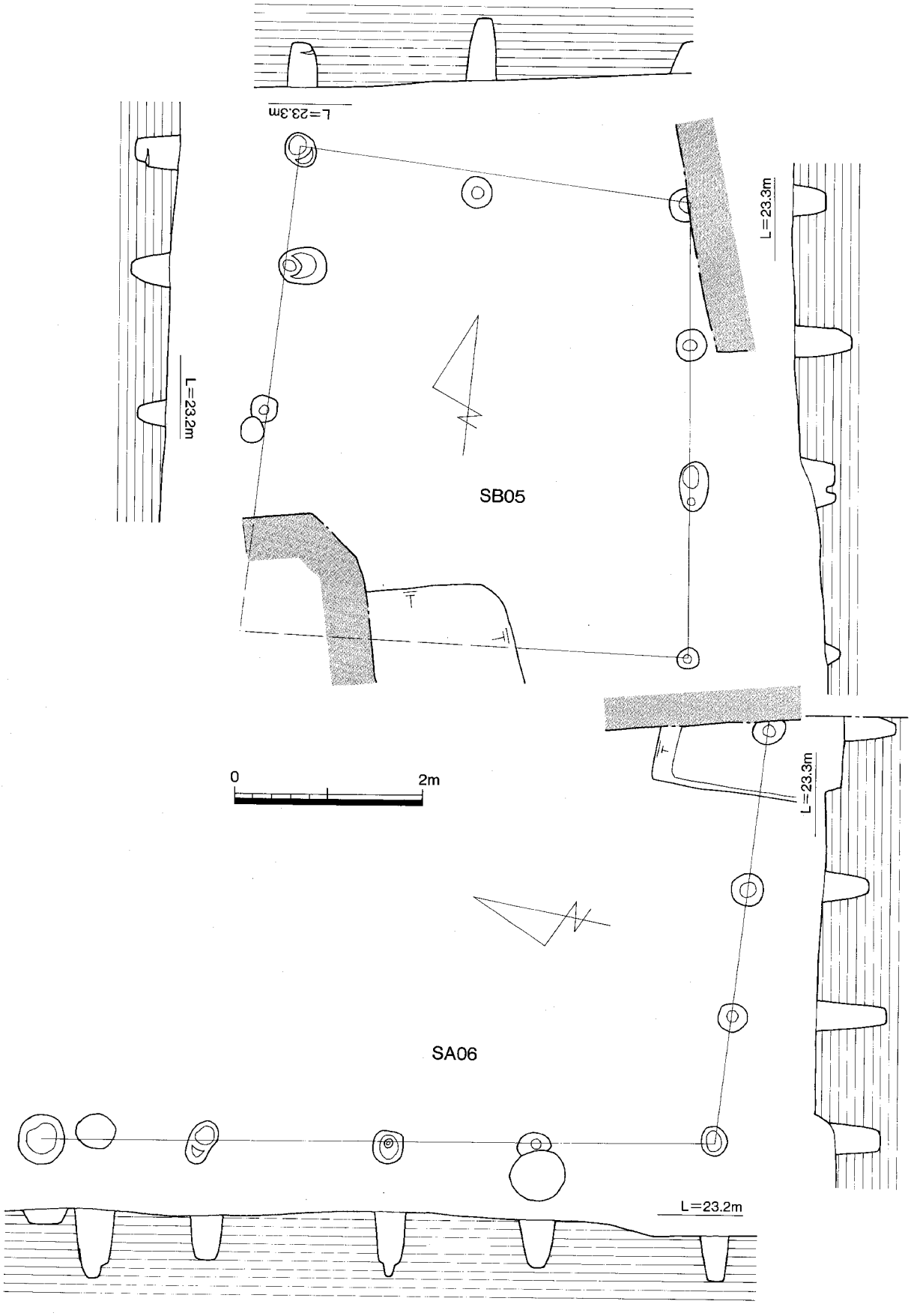
調査区中央のくびれ部分に位置する2間×3間の側柱建物である。建物の主軸方向は磁北より6°西にずれ（N－6°－W）、梁間4.20m、桁行4.90mを測る。



第4図　SB01、02掘立柱建物実測図（1/40）



第5図　SB03、04掘立柱建物実測図（1/40）



第6図　SB05掘立柱建物、SA06柵列実測図（1/60）

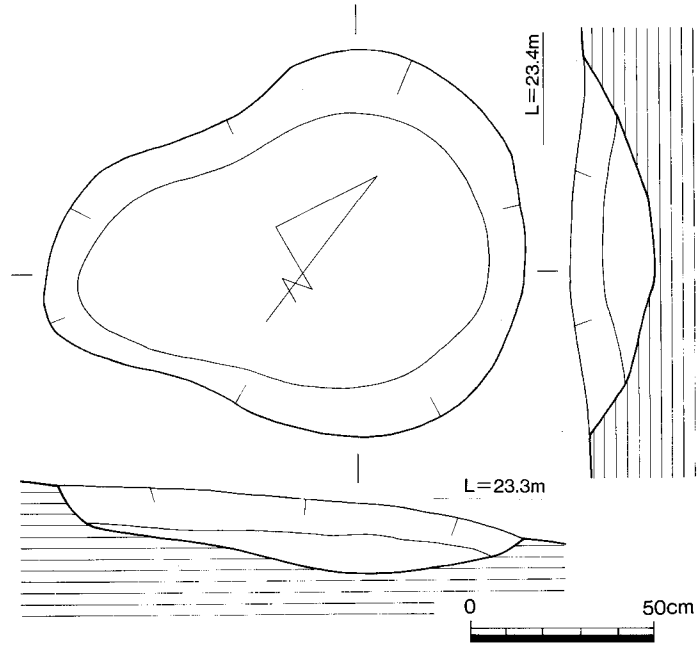
SA06柵列（第6図）

調査区北半の東寄りに位置するL字型の柵列である。南北方向の柵列は4間、7.14mで、軸方向は磁北より12°西にずれる（N－12°－W）。東西方向の柵列は調査区内で3間、4.48mを検出し、さらに調査区外へつづいているようである。軸方向は磁北より85°東にずれる（N－85°－E）。柱穴は掘立柱建物のものより概して径が小さいが、深さは同等である。柱穴の切り合い関係よりSB01よりSA06が古い。

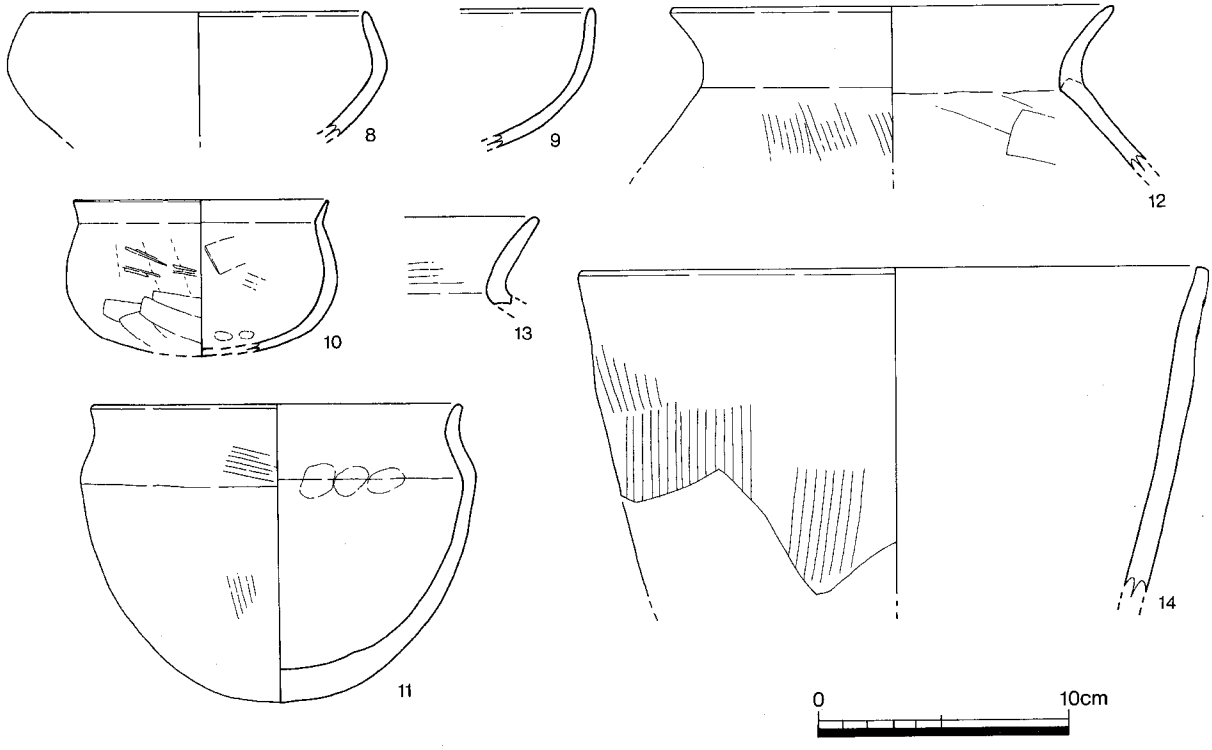
SK07土壙（第7図）

調査区北半の中央、SB04の北に位置する不整形の土壙である。長軸1.27m、短軸1.03mを測り、主軸方向は磁北より52°東にずれる（N－52°－E）。壁の立ち上がりは5～19cm、深さ約20cmと浅い。土器片が比較的密に出土した。

当初は壁の立ち上がりが不明瞭であるので自然地形の窪みと考えたが、調査区一帯にわたり遺構検出面およびその上面において遺物包含層がほとんど存在しないことから、当時の地表面がかなり削平



第7図　SK07土壙実測図（1/20）

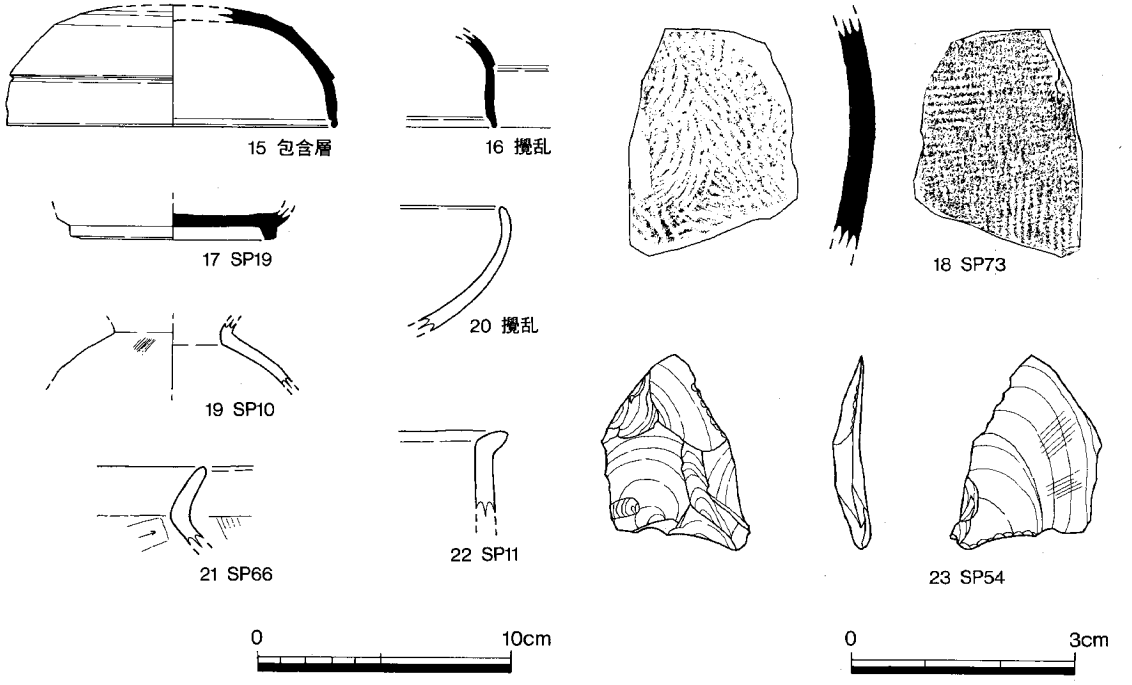


第8図　SK07出土土器（1/3）

されていると考えられる。したがって、土壙の底だけが削平されずにかろうじて残存していたものと考え、土壙とした。

出土遺物（第８図８～14）

８～14は土師器である。**８**、**９**は坏である。８は復元口径13.4cmを測る。いずれも表面の摩滅が激しい。この種の坏の小片が多く出土したが図化できるものはほとんどない。**10**も坏で口径10.2cm、器高6.2cmを測り、口縁端部がくの字状に屈曲する。外面は体部下半をケズリ、上半は面取りしたのちヨコナデ、内面はケズリ調整で底部には指頭圧痕がある。**11**は小型甕。口径14.8cm、器高11.9cmを測り、胴部で約1/8が残存する。器表は摩滅が激しい。外面はハケメ調整後、口縁部をヨコナデ、内面は肩の屈曲部に指頭圧痕がある。**12**、**13**は甕の口縁部である。12は復元口径17.8cmで、外面は胴部をハケメ、口縁部をヨコナデ、内面は胴部をケズリ、口縁部をヨコナデで調整する。**14**は甑の口縁部か。復元口径25.2cmを測る。外面はハケメ調整、内面は器表の荒れが激しい。やや外向きにまっすぐ立ち上がる。

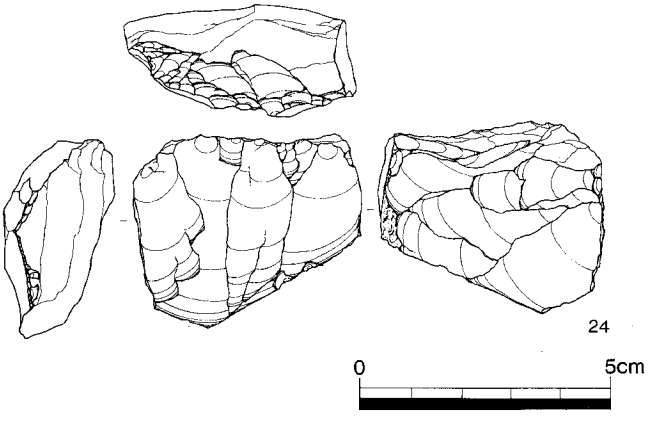


第９図　その他の出土遺物（15～22：1/3、23：1/1）

その他の出土遺物（第９図15～23）

今回の調査で出土した遺物の総量はコンテナ７箱である。旧地形が削平されていたためか、遺構以外の遺構検出面上で出土した包含層出土遺物がほとんどない。したがって、柱穴等から出土したという出土状況に起因して、当然遺物のほとんどすべてが細片である。比較的残存状態のよい遺物を紹介する。

15は包含層から出土した須恵器の坏蓋



第10図　試掘調査出土の旧石器（2/3）

である。口径13.0cm、器高4.9cmを測る。**16**は攪乱から出土した須恵器坏蓋の口縁部片。**17**はSP19から出土した須恵器の有高台の坏、底部。底径8.2cmを測る。**18**はSP73出土の須恵器甕の胴部片。外面に格子目タタキ、内面に同心円文の当て具痕がある。**19**はSP10出土の土師器小型壺の頸部である。**20**は攪乱から出土した土師器の口縁部片で、灰白色を呈する。この種の丸みを帯びた坏の小片が多く出土しているが、いずれも小さく表面が摩滅している。**21**はSP66出土の土師器甕の口縁部片である。**22**はSP11から出土した。甕の口縁部か。**23**はSP54から出土した黒曜石のナイフ形石器である。

また、試掘調査において旧石器が1点出土している（第10図24）。**24**は石核で、材質は黒曜石。左右に残る礫面の状況から、円礫を加工したもの。本調査においても鳥栖ローム部分において１×１メートルの坪掘りを４箇所でおこなったが、旧石器は出土しなかった。

三．小　結

今回の調査では、古墳時代中～後期の掘立柱建物５棟、L字型の柵列１を含む柱穴群と土壙底部状の浅い掘り込み１基を検出した。建物群はその軸方向より２時期に分かれそうである。ひとつは、主軸方向がN－17～18°－WのSB01、SB02、SB03であり、総柱建物のSB01、02が東西に並び、建物の配置も秩序を保っている。もう一方は、主軸方向がN－６～７°－WのSB04、SB05およびSA06である。SB01がSB04を切っているので、こちらの建物群のほうが古い。こちらは建物のプランが直方形にならず、かなり歪んでいる。ただ、出土遺物からは両建物群の時期差は認められず、比較的短期間に存在した集落ではなかったか。

調査区の東南側は地山が灰白色祖砂層で遺構がほとんど存在しない。当時は北西側の集落部分よりやや低く低湿地状の集落には適しない土地であったと推測する。本調査区のすぐ南で行われた第１次調査地点は低湿地であり、農工具を含む多量の木製品が出土している。その中には部分的に火を受けて炭化した遺物があり、湧水や水利に関わる祭祀遺構の可能性がある。南の低湿地周辺に生産地としての水田を作り、すぐ北の微高地上に小規模な集落が存在する。そのような古墳時代の桧原地域の風景が思い描かれよう。

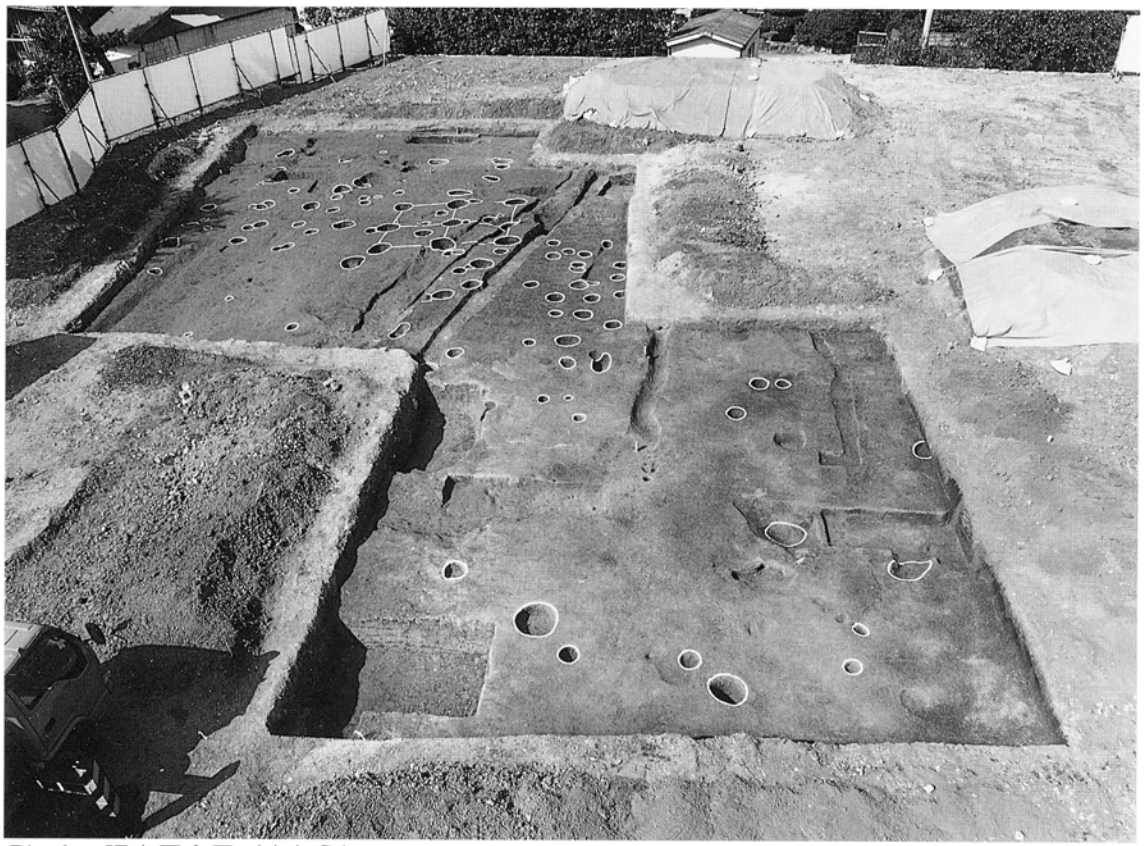
また、試掘調査において、旧石器時代の黒曜石石核が１点出土したため、本調査においても一部掘り下げを行い、その確認に努めたが、まったく出土しなかった。

第1表　桧原遺跡群第5次調査　遺物観察表

掲載番号	種類	器種	出土遺構	口径	底径	器高	保存状態	色　　調	備　考
1	須恵器	坏蓋	SB01	13.0		5.6	1/5	青灰	
2	須恵器	坏蓋	SB01	—	—	—	口縁部片	青灰	
3	須恵器	坏	SB01	11.0	—	—	1/5	青灰	
4	須恵器	器台	SB01	—	—	—	脚部片	灰	
5	須恵器	甕	SB01	—	—	—	胴部片	灰白	焼成不良、軟質
6	土師器	把手	SB01	—	—	—	把手のみ	橙	
7	須恵器	器台	SB04	—	—	—	口縁部片	灰白	
8	土師器	坏	SK07	13.4	—	—	1/2	にぶい橙	
9	土師器	坏	SK07	—	—	—	小片	浅黄橙	
10	土師器	坏	SK07	10.2	—	6.2	1/2	明黄褐	
11	土師器	小型甕	SK07	14.8		11.9	1/8	にぶい黄橙	
12	土師器	甕	SK07	17.8	—	—	口縁1/4	外：橙、内：灰	
13	土師器	甕	SK07	—	—	—	口縁部片	外：灰褐、内：にぶい黄褐	
14	土師器	甑	SK07	25.2	—	—	上半1/6	外：橙、内：灰褐	
15	須恵器	坏蓋	包含層	13.0	—	4.9	2/5	灰白	
16	須恵器	坏蓋	攪乱	—	—	—	口縁部片	灰白	
17	須恵器	高台付坏	SP19	—	8.2	—	底部1/4	灰	
18	須恵器	甕	SP73	—	—	—	胴部片	青灰	
19	土師器	小型壺	SP10	—	—	—	体部上半	橙	
20	土師器	坏	攪乱	—	—	—	小片	浅黄橙	
21	土師器	甕	SP66	—	—	—	口縁部片	淡黄	
22	土師器	甕	SP11	—	—	—	口縁部片	橙	
23	石器	ナイフ	SP54	—	—	—	完形	黒	黒曜石
24	石器	石核	試掘調査				完形	黒	黒曜石

第2表　桧原遺跡群第5次調査　遺構観察表

遺構番号	掲載図	長さ（m）	幅（m）	深さ（cm）	主軸方向	備　考
SB01	第4図	3.36	3.03	35～70	N－18°－W	2間×2間の総柱建物
SB02	第4図	3.12	2.85	15～45	N－17°－W	2間×2間の総柱建物
SB03	第5図	4.2	2.43	20～40	N－17°－W	1間×3間
SB04	第5図	3.41	2.98	25～50	N－7°－W	2間×2間の側柱建物
SB05	第6図	4.9	4.2	20～45	N－6°－W	2間×3間の側柱建物
SA06西柵	第6図	7.14		10～40	N－12°－W	L字形の柵列
SA06南柵	第6図	4.48		30～50	N－85°－E	
SK07	第7図	1.27	1.03	20	N－52°－E	底がかろうじて残る

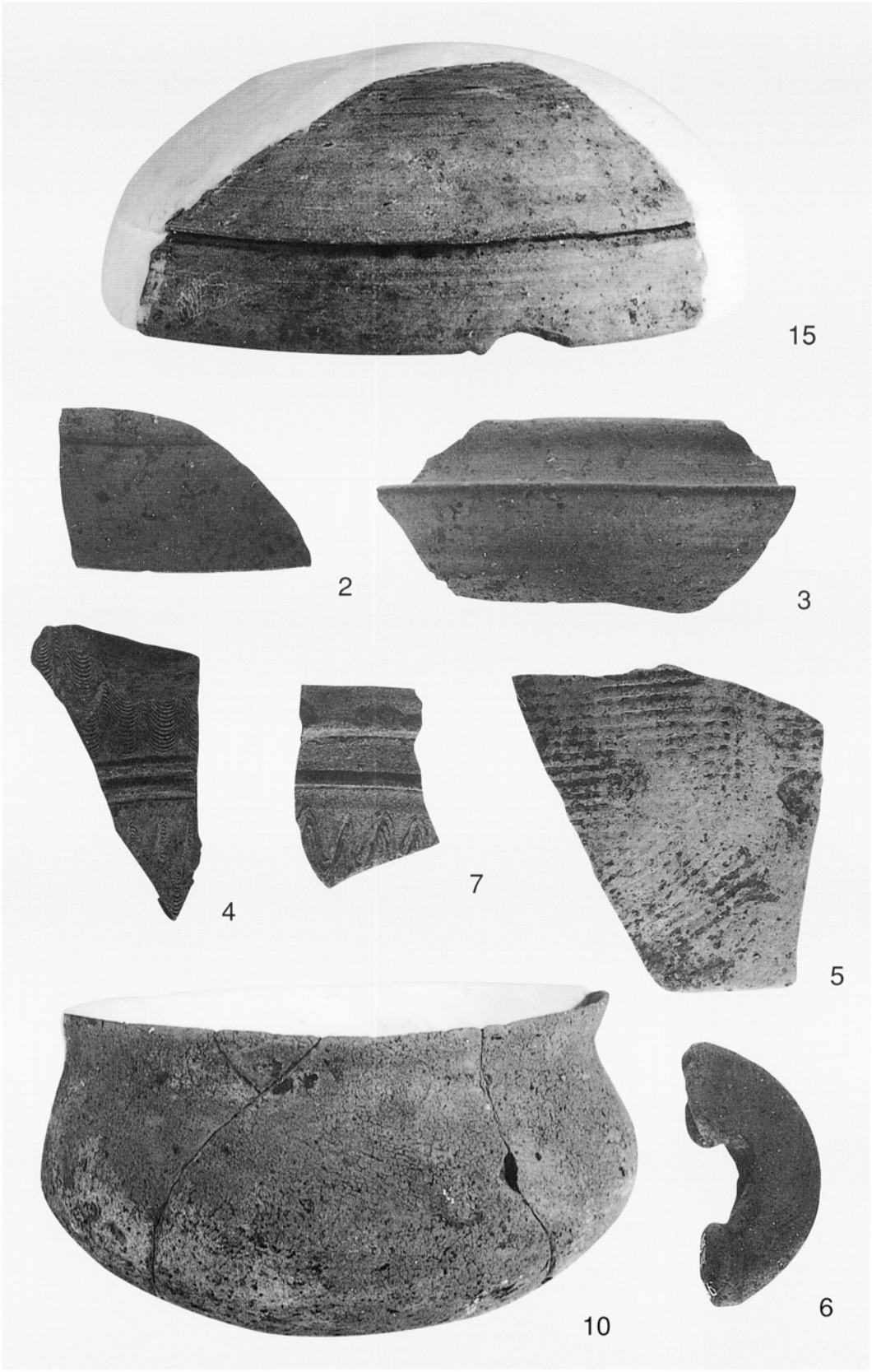


PL.1　調査区全景（南から）

PL.2　調査区北半（北東から）

PL.3　調査区北半（南から）

PL.4　旧石器を探す



PL.5　出土遺物

曰佐遺跡群第２次調査

遺跡略号　OSS－２
調査番号　９９５７

例　言

1．本書は南区曰佐４丁目514番９他における賃貸共同住宅建築に伴い、福岡市教育委員会が平成11年12月１日から平成12年１月13日にかけて実施した曰佐遺跡群第２次調査の報告書である。
2．遺構番号は通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付している。遺構略号は柵列がSA、掘立柱建物がSB、溝がSD、土壙がSK、柱穴がSPである。
3．遺構および遺物の実測は上角智希がおこなった。
4．製図は上角、久家春美が、拓本は宮坂環がおこなった。
5．遺構写真撮影は上角が、遺物写真撮影は柳智子がおこなった。
6．本書使用の方位はすべて磁北である。
7．本書に係る遺物・図面・写真は、すべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
8．本書の執筆は上角がおこなった。

一．はじめに

1．調査にいたる経緯

平成11年７月14日、立川圭一氏より福岡市南区曰佐４丁目514番９他における賃貸共同住宅建設に先立ち、埋蔵文化財事前審査申請書が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は曰佐遺跡群の範囲内に位置しており、北側隣接地でおこなわれた第１次調査では中世の集落と縄文時代前期から突帯文土器期にかけての遺物包含層が検出されている。これを受けた埋蔵文化財課では、平成11年９月２日に試掘調査を実施し、地表下35～80cmの深さで中世の遺構を確認した。よって本調査が必要であるとの結論に達し、協議の結果、建物建築により遺構が破壊される900㎡について記録保存のための発掘調査（本調査）を実施することで合意した。

本調査は平成11年12月１日から平成12年１月13日にかけて実施した。

2．調査組織

調査は以下の組織でおこなった。

調査委託　立川圭一

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　西憲一郎（前任）　生田征生（現任）

調査総括　文化財部長　柳田純孝

埋蔵文化財課長　山崎純男

埋蔵文化財第２係長　力武卓治

調査庶務　谷口真由美（前任）　御手洗清（現任）

試掘担当　杉山富雄、宮井善朗

調査担当　本田浩二郎、上角智希

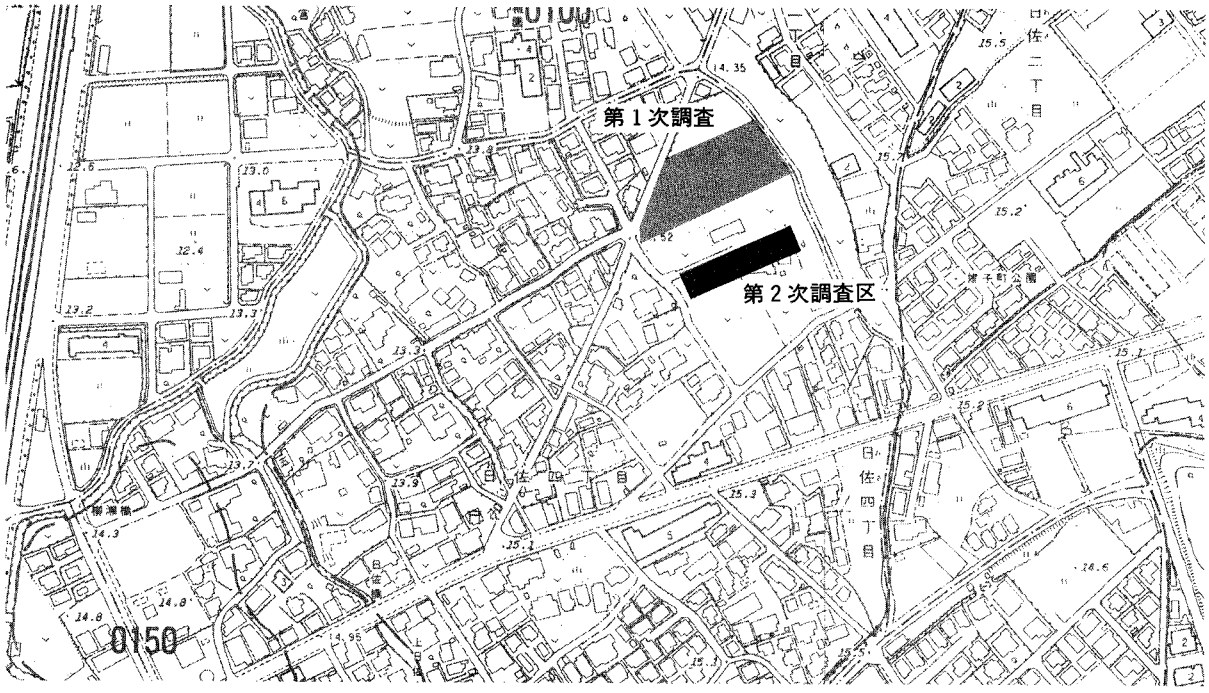
調査作業　長野嘉一、浦伸英、坂下達男、薗部保壽、野村道夫、吹春哲男、前山政義、吉田米男、香田信子、中村桂子、安田光代、山下智子、吉田恭子、加藤常信、徳守広宣、吉田博昭、沢田悦子、牛島靖、越智信孝、木原保生、玉田重人、野田淳一、岩本三重子、澄川アキヨ、中村サツエ、中村フミ子、西川シズ子、西山径子、藤野トシ子

整理作業　宮坂環、平川めぐみ、久家春美

3．位置と環境

曰佐遺跡群全体の位置と環境については序章を参照していただきたい。現在の地形環境は標高約14～15mを測り、一帯はほぼ平坦な地形である。調査の数年前までは養牛用の牧場として使用されていた。本調査地点の北側隣接地で1986年に第1次調査がおこなわれ、中世初期の集落と縄文時代前期から終末期にかけての遺物包含層が検出されている。

遺跡名	曰佐遺跡群　第２次調査			調査番号	９９５７
所在地	福岡市南区曰佐４丁目５１４番９他			調査略号	OSS－２
開発面積	2969㎡	調査面積	900㎡	調査期間	1999年12／1～2000年1／13



第１図　調査区の位置（1/4000）

二．調査の記録

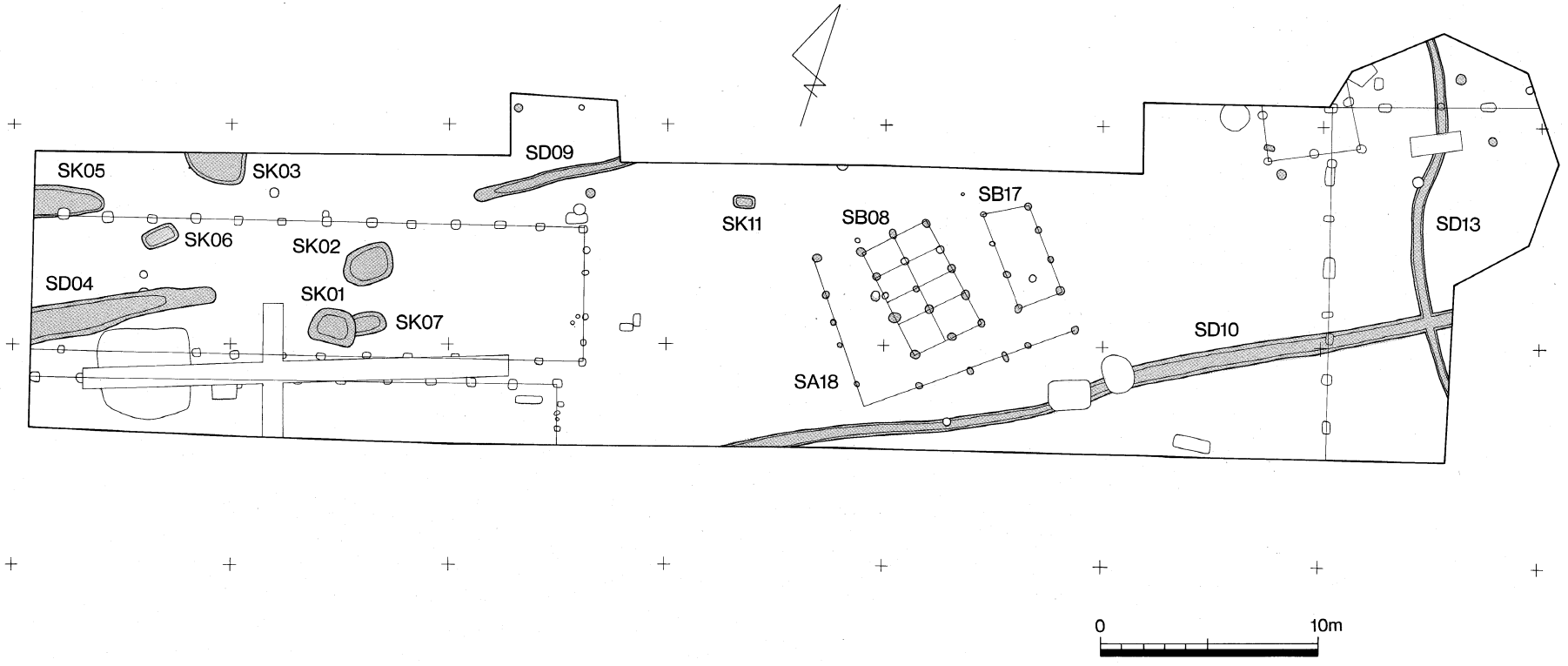
１．調査の概要

曰佐遺跡群第２次調査は、平成11年12月１日から平成12年１月13日にかけて実施された。北接する第１次調査の成果をもとに、中世遺構面と縄文時代遺構面の２面を設定、表土を重機で除去した後、人力による遺構検出および遺構精査をおこなった。

中世遺構面は東西に細長い略長方形をなし、調査面積は約900㎡である。遺構面は地表下45～80cmの高さで検出、西側が高く標高約13.4mで、東側はそれから30cmほど緩やかに低くなっていく。地山は調査区西半が赤みの強い橙色シルト、東半が灰白色～暗灰白色砂質土である。

検出された遺構は、掘立柱建物２と柵列１からなる屋敷、土壙７、溝４、ピット少数で、遺構密度はあまり高くない。土壙には現地火葬墓や土葬墓と考えられるものがある。現代の攪乱が多く、西にビニールハウス２棟、東に牧場に付随するL字形の柵列があるほか、子牛の死骸を埋めた穴やごみ焼却坑等が多く存在する。遺構埋土は西側橙色シルトの箇所では暗褐色シルトで検出が容易であったが、中央から東にかけての砂質土部分では地山と同じ灰白色のシルトで分かりづらく、とくに掘立柱建物と柵列の柱穴群は削平を受けて非常に浅いことも重なって、検出は困難であった。出土遺物は中世の土師器坏・小皿、青磁、白磁等である。

つづく縄文時代遺構面の調査では、北接する第１次調査地点で先土器時代、縄文前期～終末期の遺物包含層が検出され、とくに縄文後期から終末突帯文土器期の土器が多く出土していることから、該期の水田面が存在する可能性もあると考え、重機による表土除去に入った。中世遺構面より下には砂層が厚く堆積する。排土中からごく少量の縄文後晩期の土器片を採集、土層断面に自然流路と推定される部分が現われたものの、人力で掘り下げるのは調査期間等の事情から無理なので重機による掘り



第２図　遺構配置図（1/300）

下げを続行、さらに縄文時代の水田面等の遺構面自体が残っていないか確認をおこなった。結果、地表下３m、一部５mまで掘り下げた時点で遺構面は存在しないと判断し掘り下げを終了、土層断面にて縄文土器を包含する自然流路の位置・方向を確認、実測作業を行い、調査を終了した。

調査全体での遺物出土量はコンテナ７箱である。

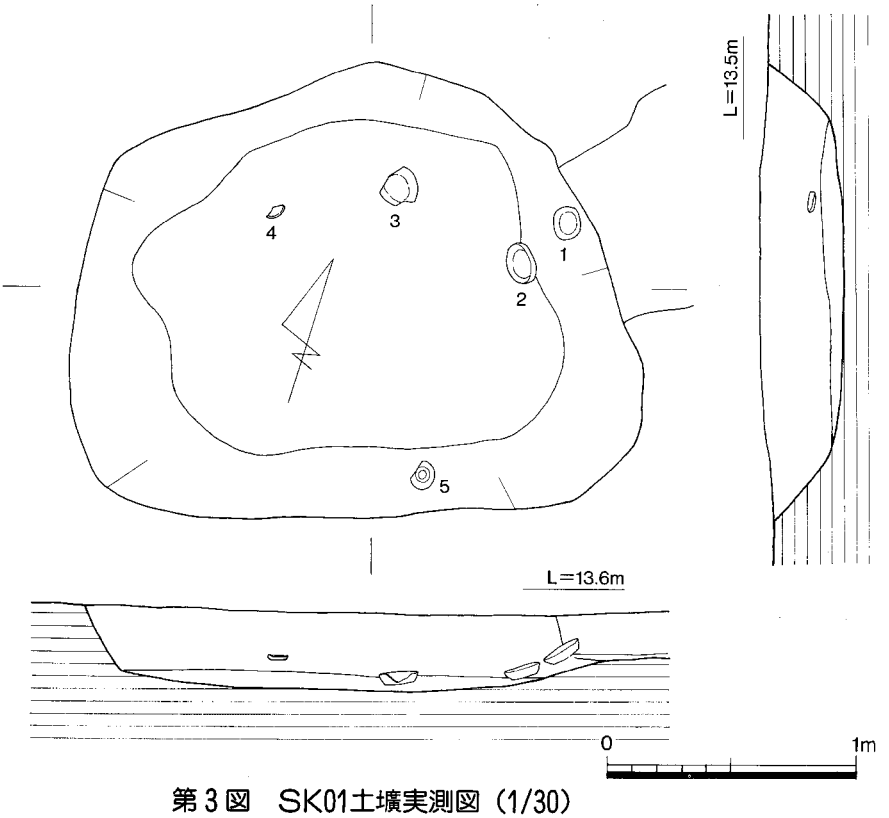
２．中世の遺構と遺物

掘立柱建物２、柵列１、土壙７、溝４、ピット13を検出した。

（１）土壙（SK）　調査区西端部を中心に７基の土壙を検出した。

ＳＫ01土壙（第３図）

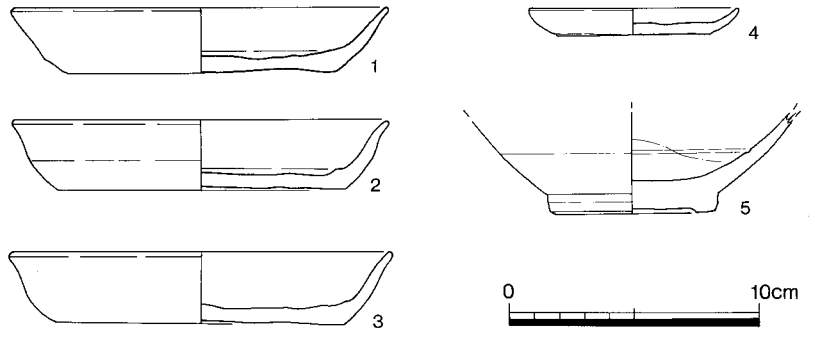
調査区西側に位置する土壙で、長軸2.28m、短軸1.82m、深さ30cmを測り、主軸方向はほぼ真東（N－87°－E）である。埋土は褐色シルト。遺構東半の底面壁沿いに土師器坏３枚、小皿１枚、白磁碗１枚が正置された状態で検出された。これらは完形のものが多く、かつ、これ以外には遺物が出土していないことから、意図的に配置されたものと推測する。土壙墓であろう。



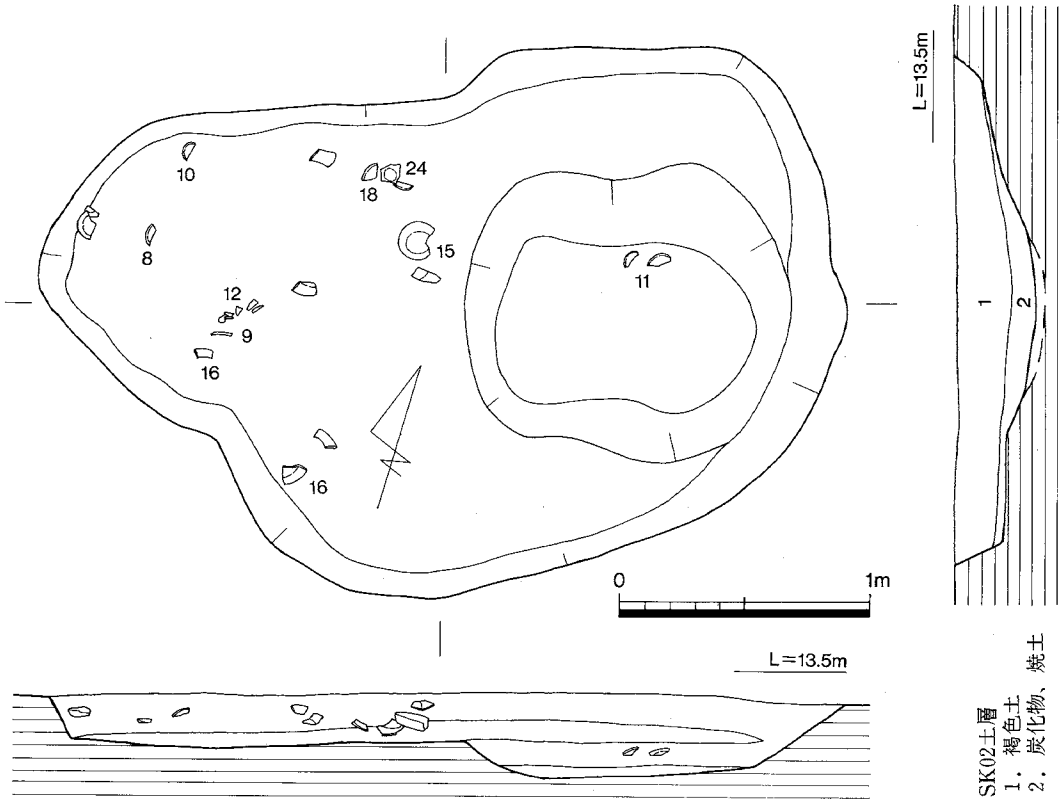
第３図　SK01土壙実測図（1/30）

出土遺物（第４図）

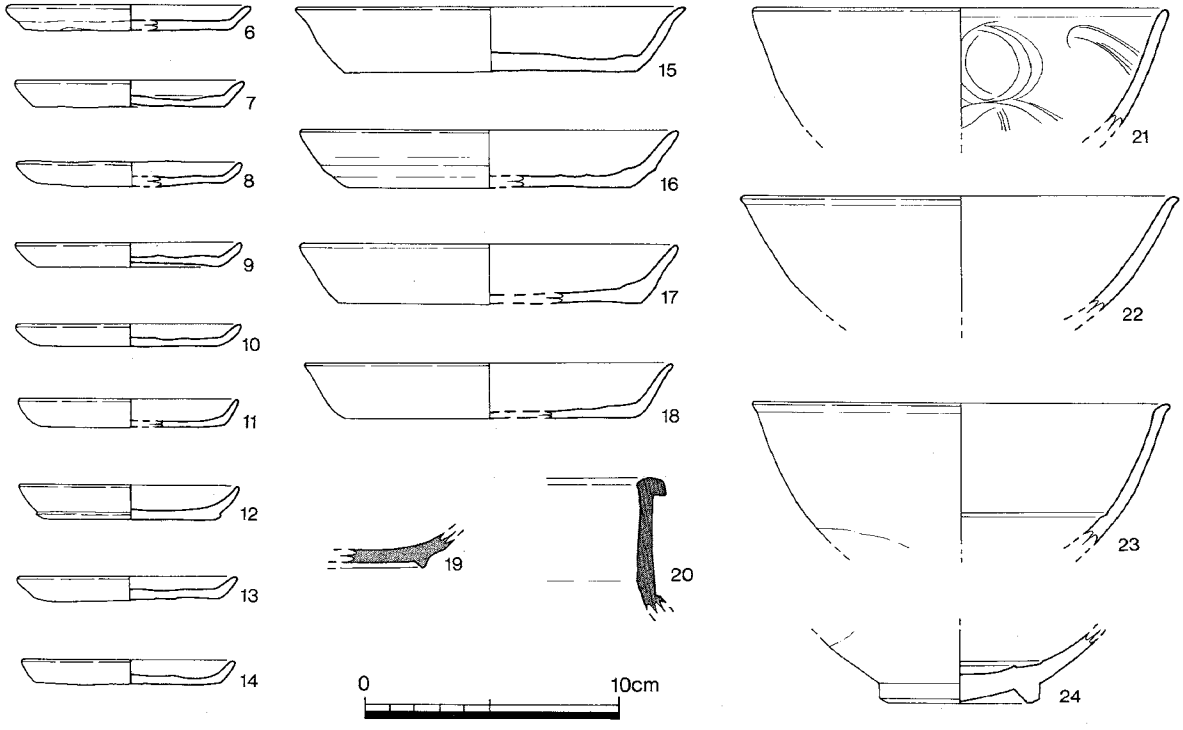
１～３は土師器坏である。口径、器高、底径は、**１**が15.0－2.6－10.6cm、**２**が15.0－2.8－11.3cm、**３**が15.2－3.0－11.4cm。いずれも底部は回転糸切りで、**１**、**３**は板状圧痕がある。**４**は土師器小皿である。口径8.4cm、器高1.1cm、底径6.2cmを測る。底部は糸切り。**５**は白磁碗。底径6.6cm。内底と外面は無釉で、内面に沈線が１条めぐる。底部は厚く、高台を浅く削り出す。



第４図　SK01出土土器（1/3）



第5図　SK02土壙実測図（1/30）



第6図　SK02出土土器（1/3）

SK02土壙（第５図）

SK01の北に位置する土壙で、長軸3.18m、短軸2.08m、深さ30cmを測り、主軸方向はＮ－73°－Ｅである。埋土は２層に分かれ、底に６cmの厚さで焼土・炭化物が堆積、その上に褐色シルトがのる。土師器坏、小皿片が300点以上、白磁、青磁、瓦器、陶器少量が出土しているが、これらの土器片は熱を受けていない。ここで何かを燃やした後、土器を大量に廃棄した状況が想定できる。現地火葬墓かと考えるが土器量の多さが気にかかる。

出土遺物（第６図）

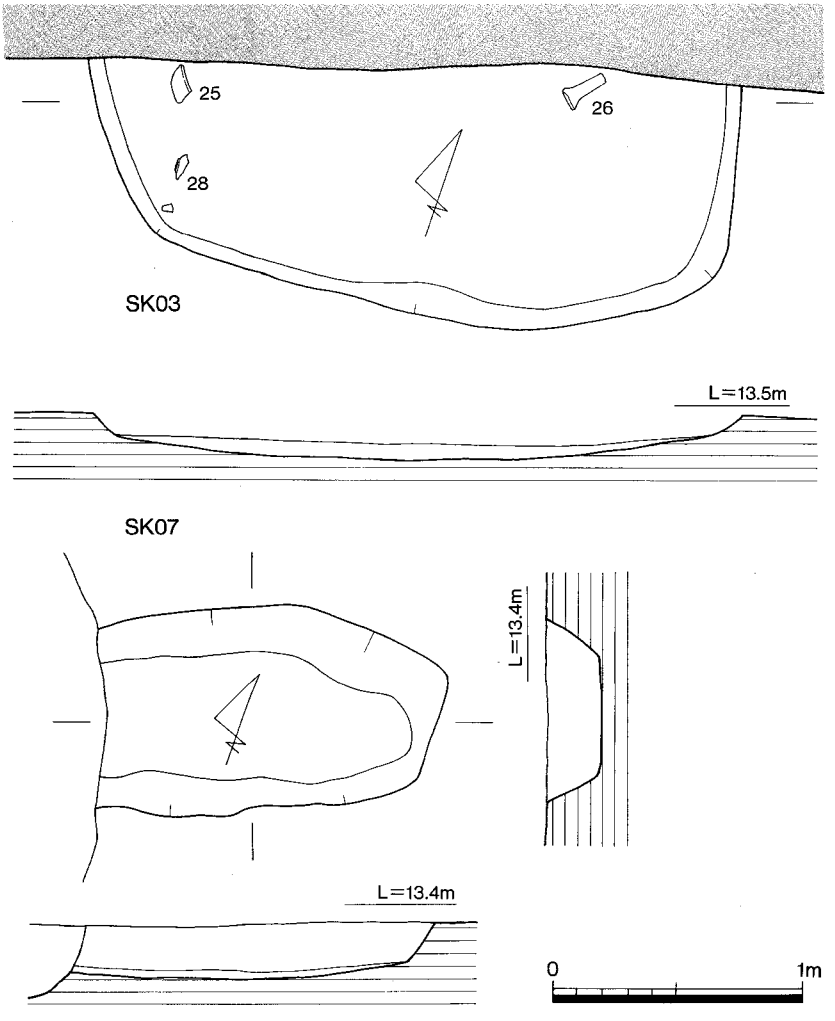
６～14は土師器小皿である。口径8.4～9.6cm、器高0.9～1.4cm、底径7.2～8.0cmを測る。いずれも底部糸切りであり、**７**、**９**、**13**、**14**は板状圧痕がある。**15～18**は土師器坏。口径、器高、底径は、**15**が15.4－2.6－11.6cm、**16**が15.0－2.3－11.0cm、**17**が15.0－2.4－12.0cm、**18**は14.6－2.2－11.4cm。いずれも底部糸切りで、**15**は板状圧痕を有する。**19**は瓦器椀の底部である。高台の断面は三角形を呈する。**20**は陶器の口縁部である。壺か。灰白色を呈する。**21**は龍泉窯系青磁碗。口径16.6cmを測り、内面に花文を施文する。**22～24**は白磁碗である。**22**は口径17.4cmを測る。**23**は口径16.6cmを測り、内面下部に１条の沈線を有し、外面体部下半は露胎。**24**は底部片で、底径6.6cmを測る。内底を蛇の目釉はぎ。外面は体部下半が無釉。

SK03土壙（第７図）

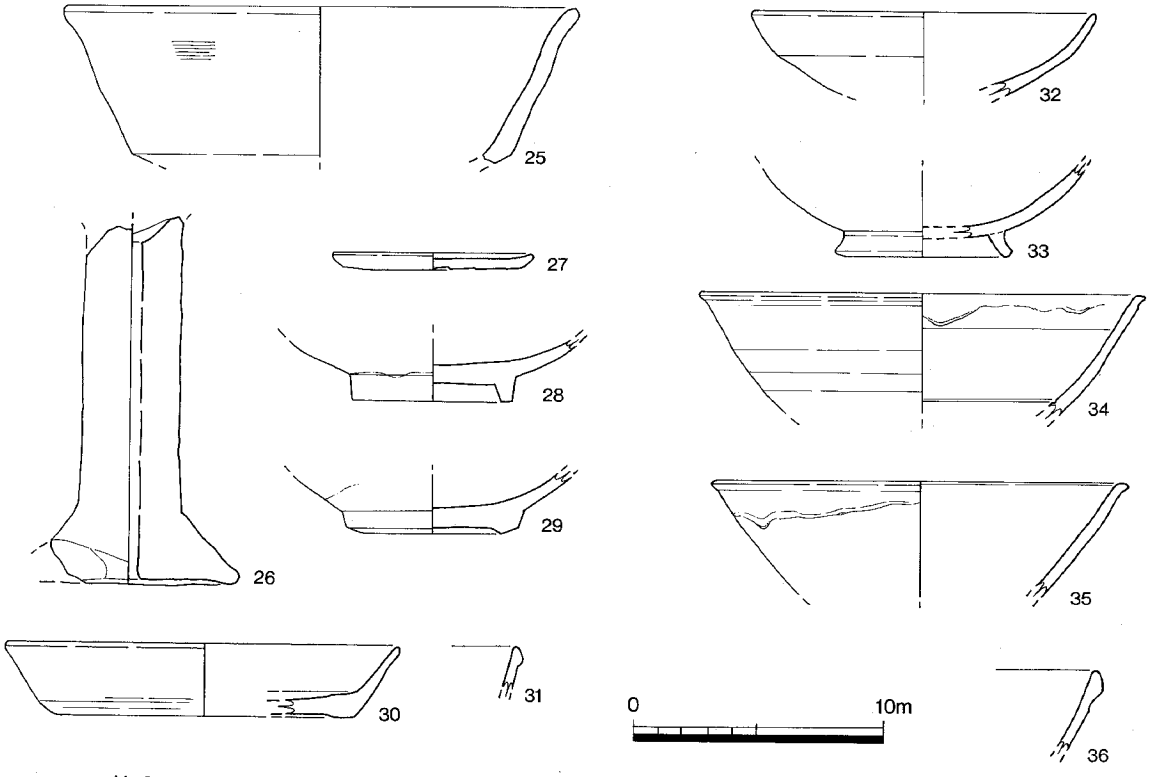
調査区西側に位置し、北側は調査区外へつづく。東西2.60m、南北1.06＋αm、深さ20cm強を測る。埋土は褐色シルト。土師器片が多く出土した。

出土遺物（第８図）

25～27は土師器。**25**は器台の受け部。口径20.4cm。灰白色を呈する。26と同一個体であろう。**26**は器台の脚部で、残高14.7cm。中央に径８mmの穴が貫通し、表面は縦方向の雑な調整を施す。**27**は小皿で、口径8.0cm、器高0.7cm、底径7.0cmを測る。底部糸切りで板状圧痕がある。**28**、**29**は白磁碗の底部。**28**は底径6.4cmで高台は露胎。**29**は底径7.2cmで、高台は無釉で浅く削り出す。



第７図　SK03、07土壙実測図（1/30）



第8図　SK03、07、SD04出土土器（1/3） 25～29：SK05・30～31・SK07・32～36：SD04

SK05土壙

調査区西端に位置し、調査区西側へ続く細長い楕円形の土壙である。長軸3.3＋αm、短軸1.4mを測り、主軸方向はN－80°－Eである。土師器片50点ほどが出土した。

SK06土壙

SK05の東側に位置する方形の土壙で、長軸1.6m、短軸0.9mを測り、主軸方向はN－50°－Eである。土師器片5点と白磁片1点が出土した。

SK07土壙（第7図）

SK01に切られる。長軸1.36＋αm、短軸0.80m、深さ20cmを測る。主軸方向はN－58°－Eである。埋土は褐色シルト。

出土遺物（第8図30～31）

30は土師器坏である。口径13.5cm、器高2.9cm、底径12.0cmを測る。底部糸切り。**31**は白磁碗の口縁で小さな玉縁状を呈する。

SK11土壙

調査区中央に位置する方形の土壙で、長軸1.0m、短軸0.6mを測り、主軸方向はN－85°－Eである。土師器片5点が出土した。

（2）屋敷

調査区ほぼ中央で掘立柱建物2棟とL字形の柵列からなる屋敷を検出した（第9図）。柱穴はいずれも浅く、時期を特定できる遺物は出土していない。調査段階では柱穴が規則的に並ぶ状況を確認し、全体をSB08として記録したが、整理段階でいろいろ復元を試みた結果、上述のような復元案に至り、新たにSB17、SA18の遺構番号を付した。

SB08掘立柱建物（第9図）

2間×4間の総柱建物である。梁間3.36m、桁行5.40mを測り、主軸方向はN－47°－Wである。柱穴は5～17cmと浅く、埋土は灰白色シルトである。土師器の小片が1点出土したのみである。

SB17掘立柱建物（第9図）

SB08の東に隣接する1間×3間の掘立柱建物である。梁間2.10m、桁行4.64mを測り、主軸方向はN－39°－Wである。柱穴は5～18cmと浅く、埋土は灰白色シルト。遺物は出土していない。

SA18掘立柱建物（第9図）

SB08、SB17の西と南につくられたL字形の柵列である。西側の柵列は5間、推定7.06mで、主軸方向はN－38°－Wである。南側の柵列は6間、推定10.24mで、主軸方向はN－53°－Eである。柱穴はいずれも浅く、L字のかなめ部分にあたる柱穴が検出できなかった。削平されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

（3）溝

調査区全体にわたり4条の溝を検出した。溝は相互に直交し、土地を細長い方形に区画するための屋敷地の区画溝と考えられる。

SD04溝

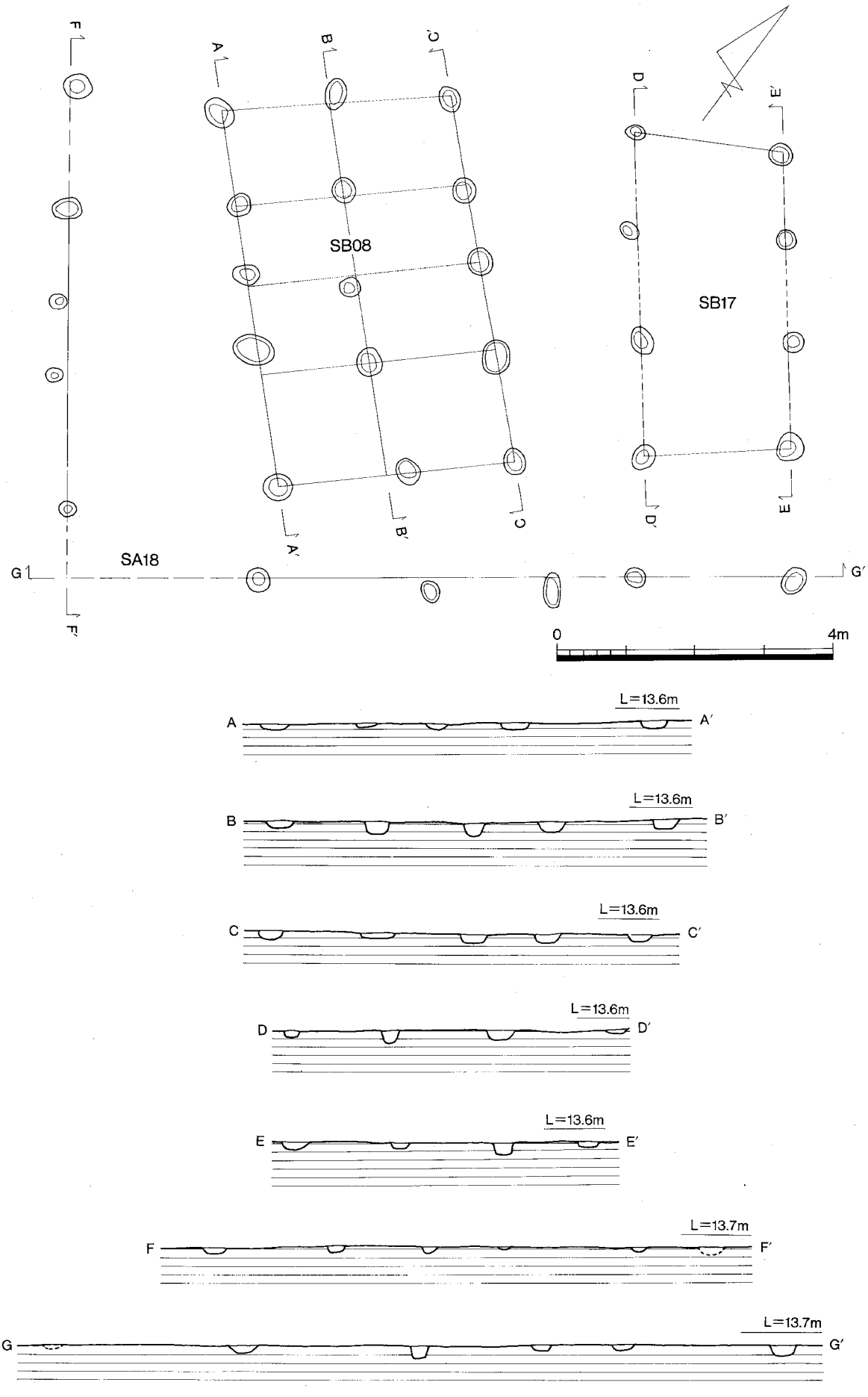
調査区西端を磁北から59°東へずれた方向（N－59°－E）に走る溝である。幅1.4m、検出長8.7m、深さ25～30cmを測る。埋土は褐色シルト。東側は一度途切れ、約12.6mの間隔を置いて延長線上にSD09が位置する。SD04と09は同一の溝であり、間に溝を掘らない部分があったか、あるいは間の部分が当初やや高い地形を呈していて、この部分は溝が完全に削平されたか、どちらかであろう。西側は調査区外へ延びる。土師器片200点以上、白磁、須恵器、瓦器少量が出土した。

出土遺物（第8図32～39）

32、**33**は土師器の椀である。**32**は口径13.8cmを測り、体部途中に稜をもち、口縁は緩やかに内湾し、内面は丁寧になでて仕上げる。**33**は底径8.0cmを測り、断面ハの字形の高台がつく。内面は丁寧になでて仕上げる。**34**～**36**は白磁碗である。**34**は口径17.8cmを測り、口縁端部は短く外反する。内面に釉が垂れ、焼成があまく外面にピンホールがある。**35**は口径16.6cmを測り、口縁端部は短く外反する。焼成があまく外面にピンホール。**36**は小さな玉縁口縁を呈し、焼成ややあまい。

SD09溝

調査区中央北側をN－60°－E方向に走る溝である。東側は調査区外へ続き、西側は一度途切れ、延長線上にSD04が位置する。幅1.2m、検出長7.0m、を測る。埋土は褐色シルト。遺物は出土していない。



第9図　SB08、17掘立柱建物、SA18柵列実測図（1/80）

SD10溝

調査区中央から東側にかけての南縁をN－60～65°－E方向に走る溝である。検出長37m、幅1.0～0.5m、深さ10～20cmを測る。埋土は黄灰色～灰白色シルトで、土師器片が少量出土している。調査区東端でSD13と直交して切り合うが、両溝の埋土は同質で切り合い関係は確認できない。同時期に機能した溝と考えられる。北側の溝SD04、09と約13mの間隔をあけてほぼ平行に走る。

SD13溝

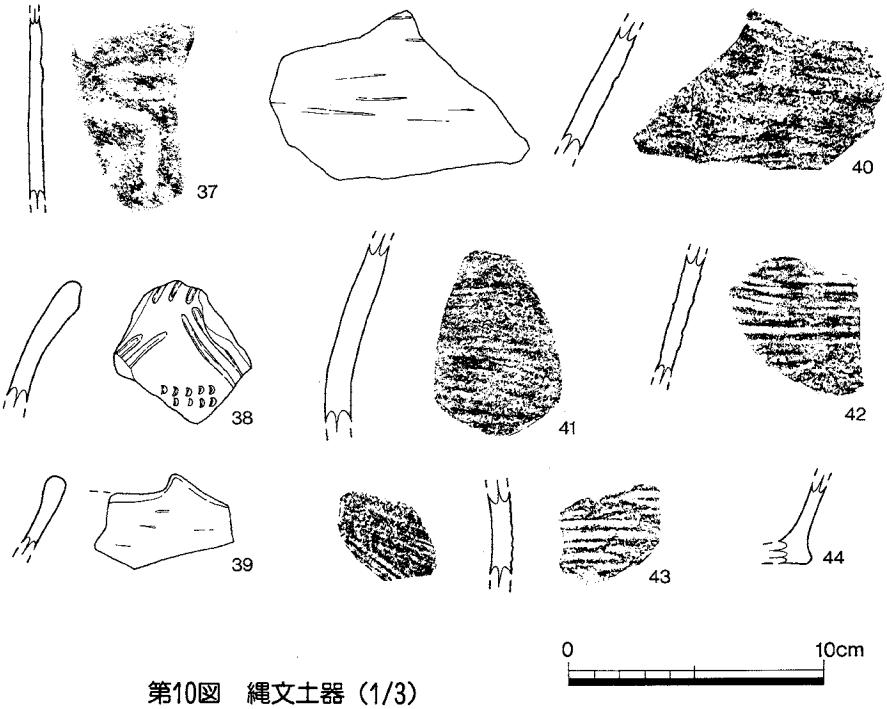
調査区東端をN－25～30°－W方向に走る溝である。検出長17m、幅0.4～0.5mを測る。埋土は灰白色シルトで、土師器片少量が出土した。SD10と直交する。

3．縄文時代の包含層と遺物

中世遺構面の調査終了後、重機によりさらに下層を掘り下げ、縄文時代遺構面の検出を試みた。調査時の所見として、北接する第1次調査区において、先土器時代、縄文前期～終末期の遺物包含層が検出され、とくに縄文後期から終末突帯文土器期の土器が多く出土している。さらに石製穂摘み具等の生産道具も出土していることから、すぐ近くに集落あるいは水田が存在する可能性が強いと考えられた。また、この縄文時代遺物包含層は、近くを流れる那珂川が幾度か氾濫した際に運ばれてきた砂層であろう。

したがって、以下のような調査方針を立てた。まず、第1次調査区の真南にあたる調査区西半について、中世遺構面下の粗砂層を重機で除去する。この段階で氾濫した河川流路の位置・方向を確認する。また、大量に縄文土器が包含され、人力による精査が必要と判断される場合には、そこで重機をとめ精査に移る。祖砂層を除去した後、下に縄文時代の遺構面が残っているかを確認し、残っていれば人力による精査をおこなう。

調査をすすめていったところ、土器の出土量はきわめて少なかったため、重機による掘り下げを続



第10図　縄文土器（1/3）

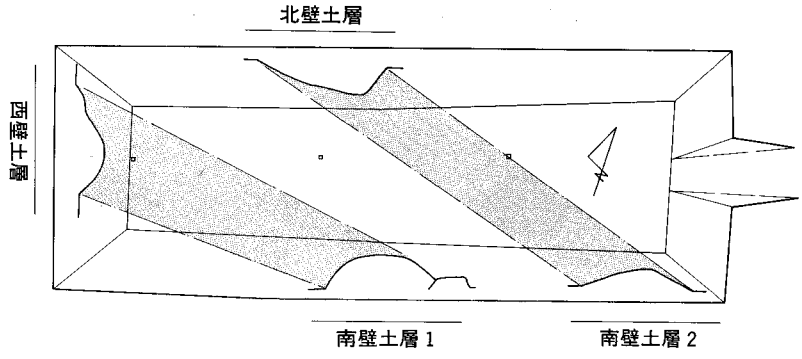
行、そのうちに断面において4箇所、氾濫河川の流路と推定される部分を確認した。さらに掘り下げを続行し、2日間で中世遺構面下約3mまで下げたが、依然として地山らしい層は検出できなかった。一部5m下まで下げたが、それでも砂層が続くのみで、湧水によりこれ以上の掘り下げは不可能と判断した。よって、縄文時代遺構面は存在しないと判断し、排土中の遺物採集のほか、断面の氾濫河川流路の土層を記録し、調査を終了した。

縄文土器（第10図）

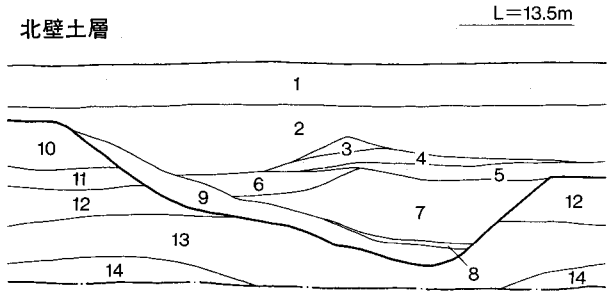
37は中期・阿高式の深鉢の小片である。**38**は後期・北久根山式の深鉢口縁部片である。**39**は浅鉢の口縁部片か。外面は黒色、内面は灰黄褐色を呈する。**40～43**は粗製深鉢の小片である。いずれも外面に粗い条痕を施し、内面はナデ調整である。**44**は底部片である。**39～44**は縄文時代後～晩期に位置付けられよう。

氾濫河川流路（第11図）

掘り下げ後、北壁、西壁に1箇所、南壁に2箇所、計4箇所で氾濫河川流路の土層断面を確認した。第1次調査において、縄文土器がこの河川流路に沿って密に分布して出土しており、その方向が判明している。その方向を手がかりに流路の方向を推定すると、図のように併行する流路が2本走っていることになる。流路は幅5～6m、深さ130～150cmを測る。

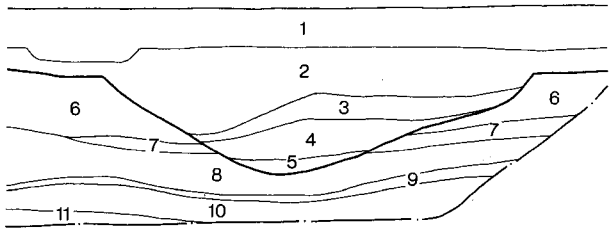


北壁土層



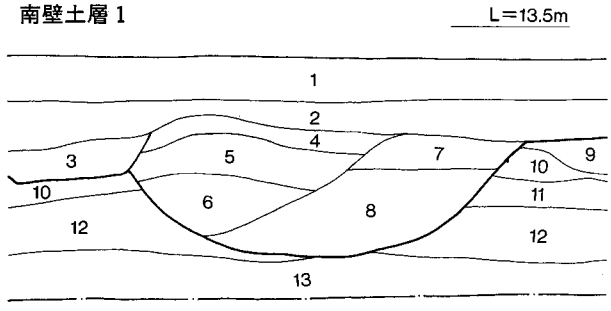
北壁土層
1．表土
2．にぶい褐色シルト
3．黒褐色精砂
4．赤褐色細砂
5．褐色レキ
6．灰白色精砂
7．灰褐色精砂
8．橙色細砂
9．灰白色精砂
10．灰褐色細砂
11．黒褐色細砂
12．灰褐色精砂
13．灰色粗砂
14．赤橙色粗砂

西壁土層



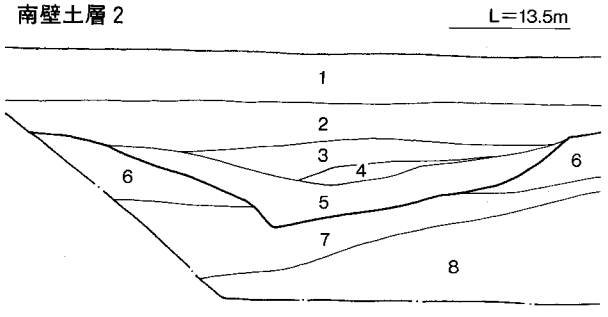
西壁土層
1．表土
2．にぶい褐色シルト
3．灰褐色細砂
4．黒色細レキと黒褐色細砂の互層
5．橙色細砂
6．黒褐色～灰褐色精砂
7．黒褐色粗砂
8．灰白～白色精砂
9．赤橙色細レキ
10．灰褐色細砂
11．赤橙色細レキ

南壁土層 1



南壁土層 1
1．表土
2．にぶい褐色シルト
3．黒色細砂。一部白色砂を含む。
4．黒褐色細砂
5．黒褐色細砂と白色精砂の互層
6．白色精砂
7．灰褐色精砂
8．灰白色精砂
9．灰白色精砂
10．暗褐色精砂
11．白色細砂と黒褐色細砂の互層
12．灰褐色粗砂
13．白色細砂

南壁土層 2



南壁土層 2
1．表土
2．にぶい褐色シルト
3．灰褐色精砂
4．橙色細砂
5．灰白色精砂
6．黒褐色細砂
7．褐色細砂
8．灰褐色粗砂

第11図　縄文時代包含層土層断面図（平面図1/400、土層図1/100）

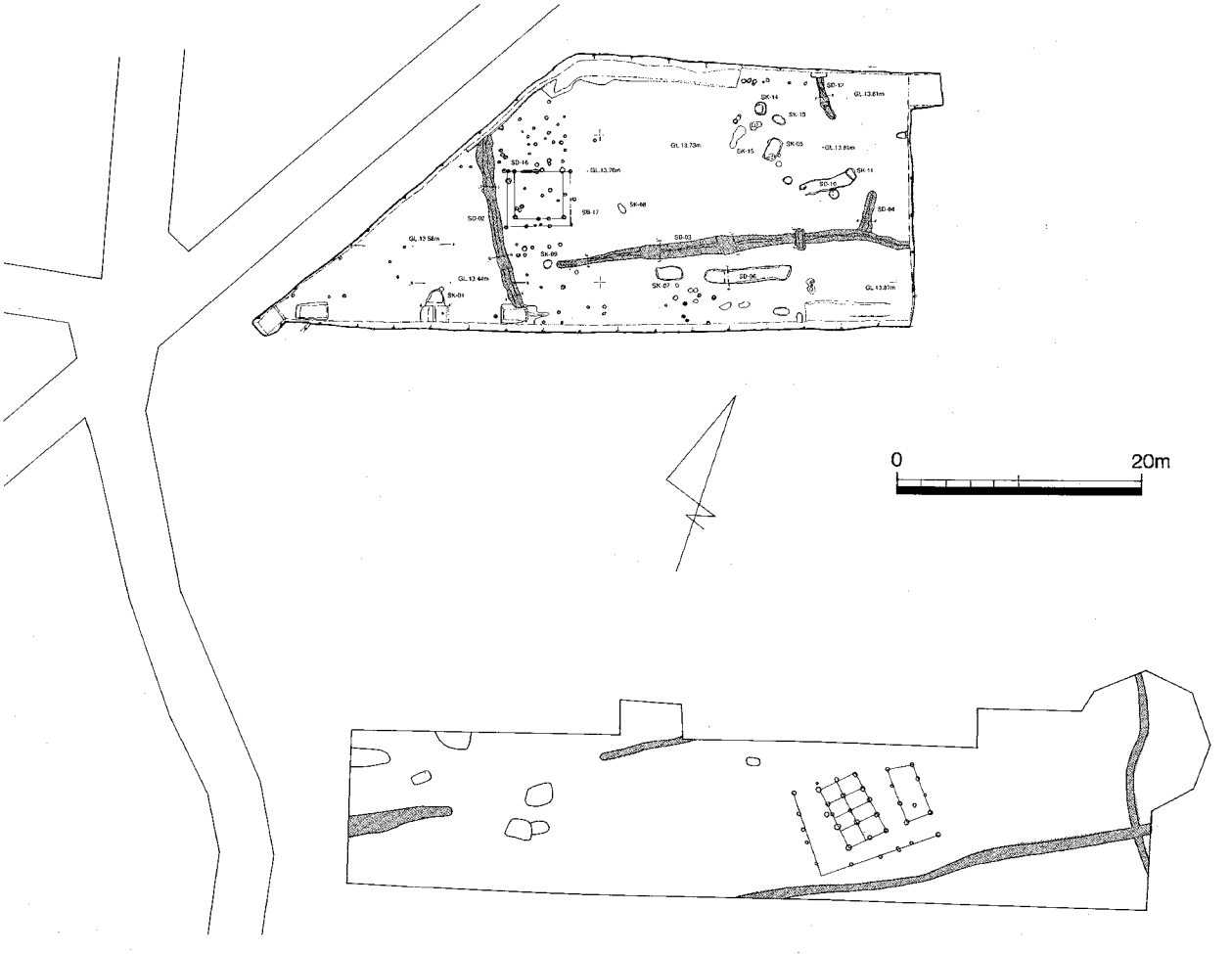
三. 小　結

今回の調査では、中世遺構面と縄文時代包含層の２面について調査をおこなった。

まず、中世遺構面では、中世前期の掘立柱建物２棟と柵列からなる屋敷と、それを囲む東西に細長い区画溝、土壙群を検出した。屋敷は調査区のほぼ中央に位置し、長方形区画の西側には土壙が数基存在し、そのうちSK02は現地火葬墓の可能性がある。またSK01も、完形土器が数点土壙東半分の底部壁沿いにいかにも副葬したかのような状態で出土しているので、土壙墓であろう。

さて、当調査地点と北接する第１次調査においても、今回の調査と同様の屋敷と区画溝が検出されており、東西方向の溝は方向がほぼ一致するようである（第12図）。この周辺は広い敷地をもつ屋敷が散在する農村集落であったと思われる。

縄文時代の遺構については、遺構面自体は確認できなかったが、２本の縄文土器を包含する氾濫河川流路を検出した。重機により掘り下げたため、採集した縄文土器の量はごくわずかである。



第12図　第１次調査との合成図（1/600）

第1表　臼佐遺跡群第2次調査　遺物観察表

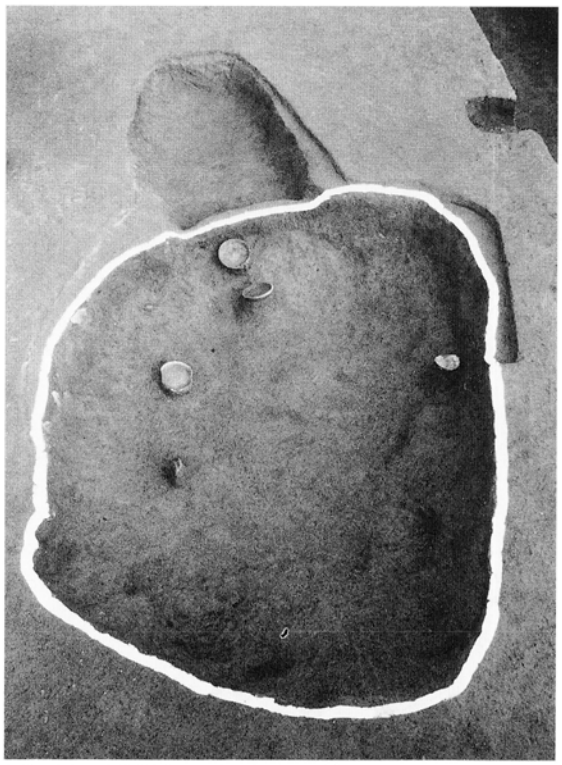
掲載番号	種類	機種	出土遺構	口径	器高	底径	保存状態	色　　調	備　考
1	土師器	坏	SK01	15.0	2.6	10.6	完形	浅黄橙	糸切り、板状圧痕
2	土師器	坏	SK01	15.0	2.8	11.3	完形	橙	糸切り
3	土師器	坏	SK01	15.2	3.0	11.4	完形	外：浅黄橙、内：橙	糸切り、板状圧痕
4	土師器	小皿	SK01	8.4	1.1	6.2	1/2	橙	糸切り
5	白磁	碗	SK01	—	—	6.6	底部	灰白	
6	土師器	小皿	SK02	9.6	1.0	8.0	1/3	にぶい橙	糸切り
7	土師器	小皿	SK02	9.0	1.1	7.4	3/4	にぶい橙	糸切り、板状圧痕
8	土師器	小皿	SK02	8.8	1.0	7.4	1/3	浅黄橙	糸切り
9	土師器	小皿	SK02	8.8	1.0	7.2	完形	浅黄橙	糸切り、板状圧痕
10	土師器	小皿	SK02	9.8	0.9	6.8	3/4	橙	糸切り
11	土師器	小皿	SK02	8.6	1.1	7.4	2/3	橙	糸切り
12	土師器	小皿	SK02	8.6	1.4	7.2	1/3	にぶい橙	糸切り
13	土師器	小皿	SK02	8.6	1.0	7.2	1/2	浅黄橙	糸切り、板状圧痕
14	土師器	小皿	SK02	8.4	1.0	7.2	1/2	橙	糸切り、板状圧痕
15	土師器	坏	SK02	15.4	2.6	11.6	完形	外：褐灰、内：橙	糸切り、板状圧痕
16	土師器	坏	SK02	15.0	2.3	11.0	1/3	灰黄褐	糸切り
17	土師器	坏	SK02	15.0	2.4	12.0	1/2	外：浅黄橙、内：褐灰	糸切り
18	土師器	坏	SK02	14.6	2.2	11.4	1/4	浅黄橙	糸切り
19	瓦器	椀	SK02	—	—	—	底部片	灰白	
20	陶器	壺	SK02	—	—	—	口縁部片	灰白	
21	青磁	碗	SK02	16.6	—	—	口縁1/5	オリーブ黄	龍泉
22	白磁	碗	SK02	17.4	—	—	口縁部1/6	灰白	
23	白磁	碗	SK02	16.6	—	—	口縁部1/8	灰白	
24	白磁	碗	SK02	—	—	6.4	底部	オリーブ灰	
25	土師器	器台	SK03	20.4	—	—	受け部	灰白	26と同一個体
26	土師器	器台	SK03	—	14.7+α	—	脚部	灰白	
27	土師器	小皿	SK03	8.0	0.7	7.0	1/2	灰白	糸切り、板状圧痕
28	白磁	碗	SK03	—	—	6.4	底部	灰黄	
29	白磁	碗	SK03	—	—	7.2	底部	灰白	
30	土師器	坏	SK07	13.5	2.9	12.0	1/5	にぶい橙	糸切り
31	白磁	碗	SK07	—	—	—	口縁部片	灰白	
32	土師器	皿	SD04	13.8	—	—	口縁部1/6	浅黄橙	
33	土師器	高台付椀	SD04	—	—	8.0	底部1/6	浅黄橙	
34	白磁	碗	SD04	17.8	—	—	口縁部1/8	灰白	
35	白磁	碗	SD04	16.6	—	—	口縁部1/5	灰白	焼成不良
36	白磁	碗	SD04	—	—	—	口縁部片	灰白	焼成ややあまい
37	縄文土器	深鉢	粗砂層	—	—	—	小片	褐灰	阿高式
38	縄文土器	深鉢	粗砂層	—	—	—	口縁部片	橙	北久根山式
39	縄文土器	浅鉢	粗砂層	—	—	—	口縁部片	外：黒、内：灰黄褐	
40	縄文土器	深鉢	粗砂層	—	—	—	小片	外：淡黄、内：黒褐	粗製
41	縄文土器	深鉢	粗砂層	—	—	—	小片	外：にぶい橙、内：にぶい黄橙	粗製
42	縄文土器	—	粗砂層	—	—	—	小片	外：灰黄褐、内：褐灰	粗製
43	縄文土器	—	粗砂層	—	—	—	小片	灰褐	粗製
44	縄文土器	深鉢	粗砂層	—	—	—	底部片	外：明褐、内：黒褐	

第2表　臼佐遺跡群第2次調査　遺構観察表

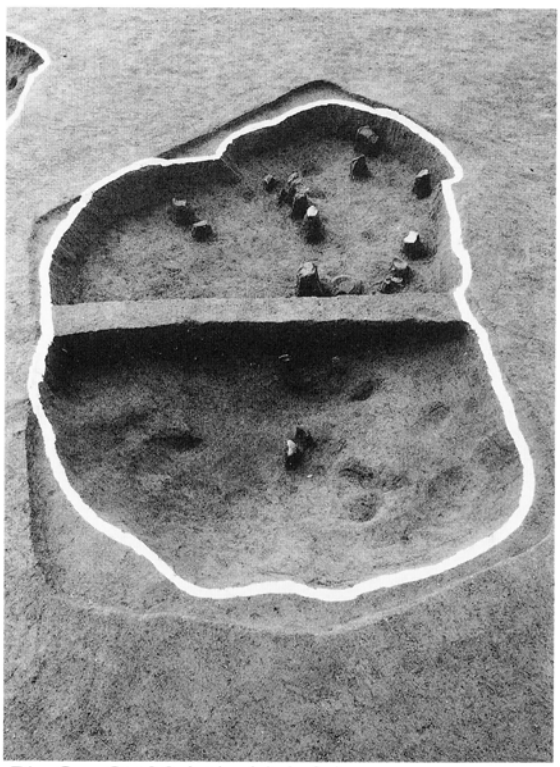
遺構番号	掲載番号	長さ（m）	幅（m）	深さ（cm）	主軸方向	備　　考
SK01	第3図	2.28	1.82	30	N-87°-E	完形の土師器坏等が出土。墓か
SK02	第5図	3.18	2.08	30	N-73°-E	底に焼土・炭化物層。火葬墓か
SK03	第7図	※2.60	※1.06	20	不明	土師器片が多く出土
SD04		※8.7	1.4	30	N-59°-E	土師器片が多く出土
SK05		※3.3	1.4		N-80°-E	
SK06		1.6	0.9		N-50°-E	
SK07	第7図	※1.36	0.8	20	N-58°-E	SK01に切られる
SB08	第9図	5.4	3.36	5～17	N-47°-W	2間×4間の総柱建物
SD09		※7.0	1.2		N-60°-E	
SD10		※37	0.5～1.0		N-60～65°-E	
SK11		1	0.6		N-85°-E	
SD13		※17	0.4～0.5		N-25～30°-W	
SB17	第9図	4.64	2.1	5～18	N-39°-W	1間×3間の掘立柱建物
SA18西柵	第9図	7.06		3～12	N-38°-W	L字形の柵
SA18南柵	第9図	10.24		10～20	N-53°-E	

※は検出した距離

PL.1　調査区全景（西から）



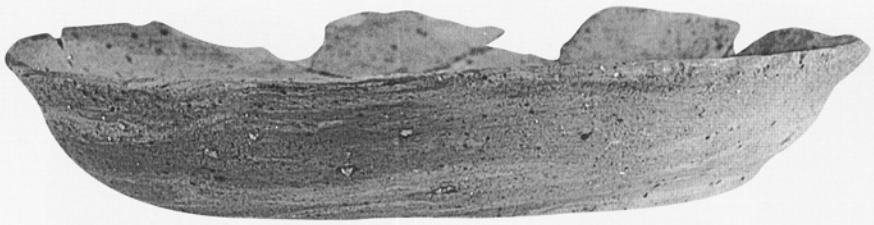
PL.2　SK01土壙（西から）



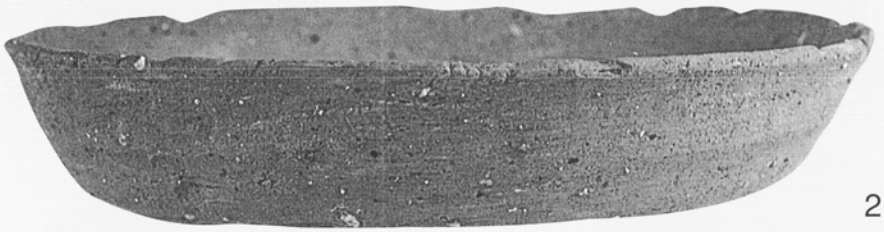
PL.3　SK02土壙（東から）

PL.4　屋敷（西から）

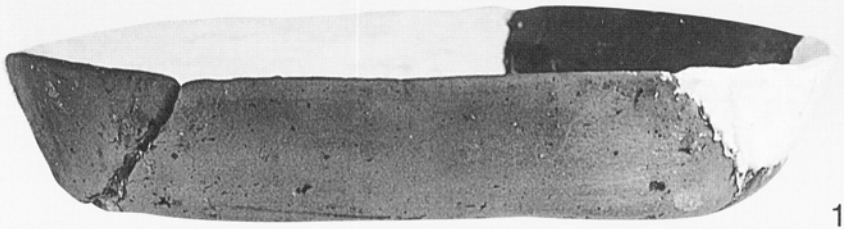
PL.5　縄文時代包含層の調査（東から）



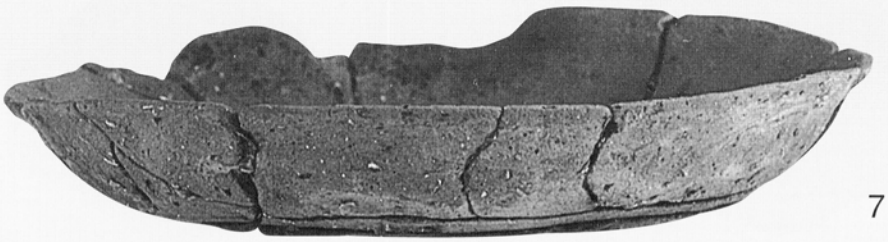
1



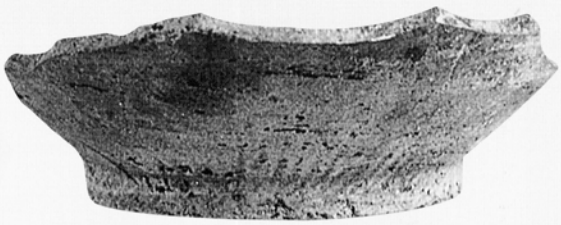
2



15



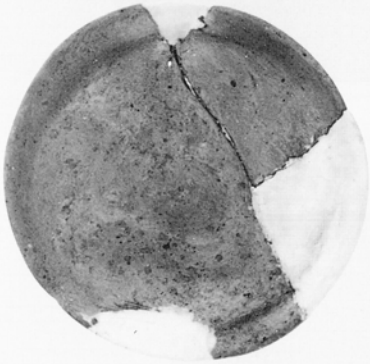
7



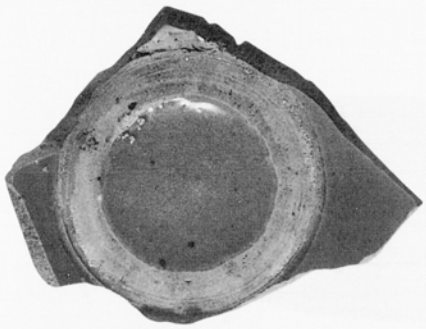
5

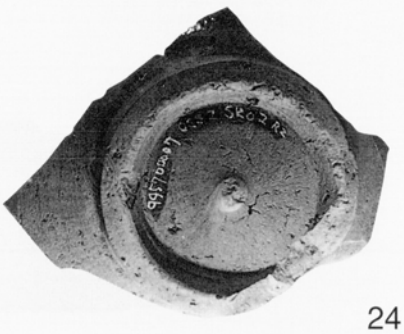
PL.6　出土遺物①

9



10

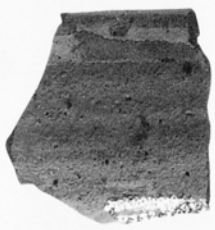




24

21

35



20

PL. 7　出土遺物②

警弥郷Ｂ遺跡群第４次調査

遺跡略号　KYB－４
調査番号　９９４４

例　言

1．本書は南区弥永３丁目11－3における共同住宅建築に伴い、福岡市教育委員会が平成11年11月11日から同年11月30日にかけて実施した警弥郷Ｂ遺跡群第４次調査の報告書である。
2．遺構番号は通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付している。遺構略号は掘立柱建物がSB、溝がSD、土坑がSK、柱穴がSPである。
3．遺構実測は榎本義嗣、阿部泰之がおこなった。
4．遺物の実測、製図は阿部がおこない、遺物写真は阿部が撮影した。
6．本書使用の方位はすべて磁北である。
7．本書にかかる遺物・図面・写真は、すべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
8．本書の執筆は阿部がおこなった。

一．はじめに

1．調査に至る経過

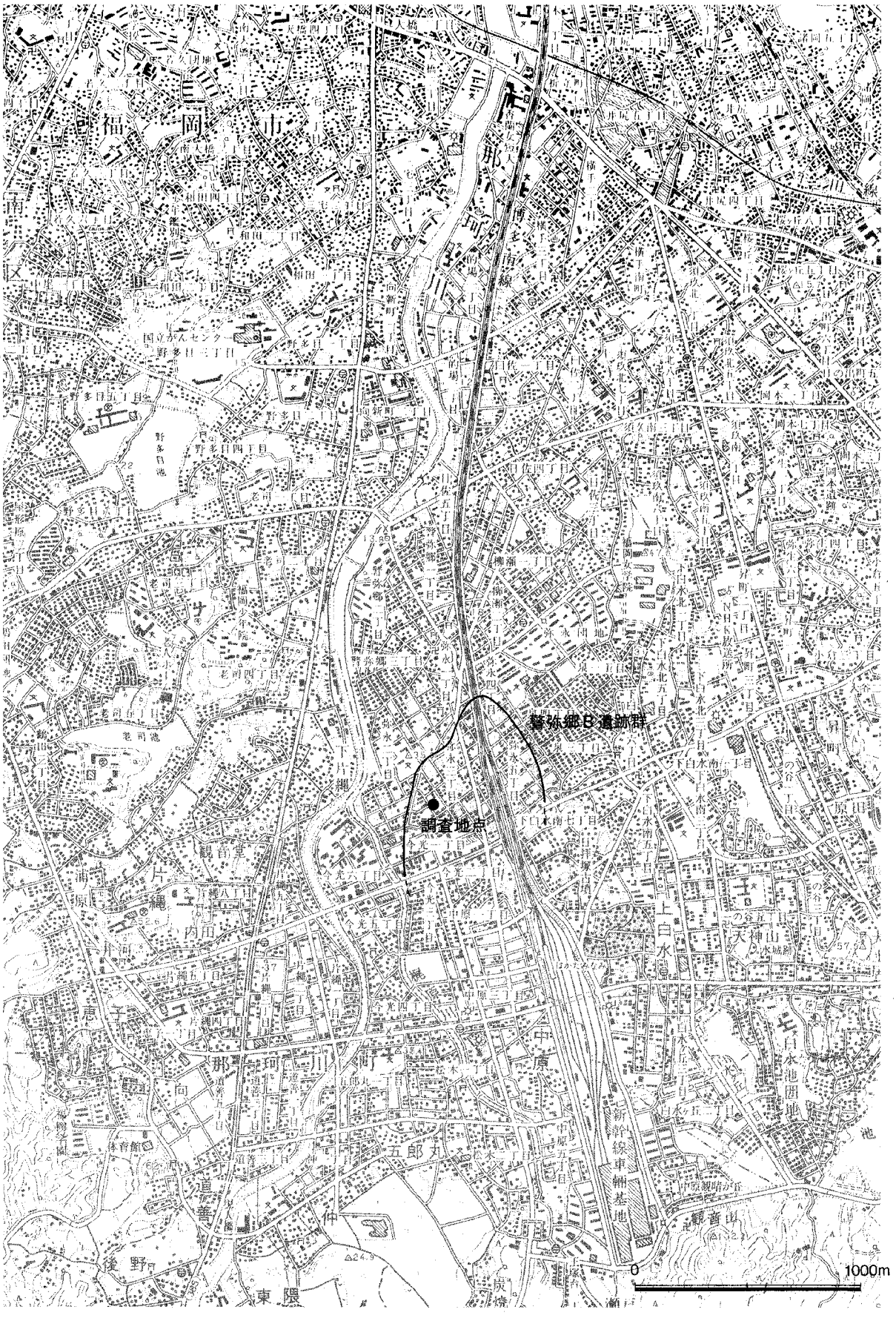
平成11年６月23日付けで新飼秀朝氏より福岡市教育委員会宛に南区弥永３丁目11-3の物件（計784.09㎡）に関しての埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号11－２－218）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である警弥郷Ｂ遺跡群（分布地図番号41－0158・遺跡略号ＫＹＢ）に含まれており、埋蔵文化財課にて平成11年10月21日に書類審査を行い、申請者に対して遺構が存在する旨を回答し（福市教埋２－２１８号）、その取り扱いに関して協議をおこなった。この結果申請地の内建物の基礎で遺構の破壊が免れない350㎡について発掘調査を行い記録保存を図ることとした。以上の協議を受けて委託契約を締結し平成11年度に発掘調査・平成12年度に資料整理・報告書作成を行うこととした。

発掘調査は平成11年11月11日～平成11年11月30日の期間で行った（調査番号9944）。調査対象地は350㎡で、調査面積は325,5㎡である。また遺物はコンテナ２箱出土している。

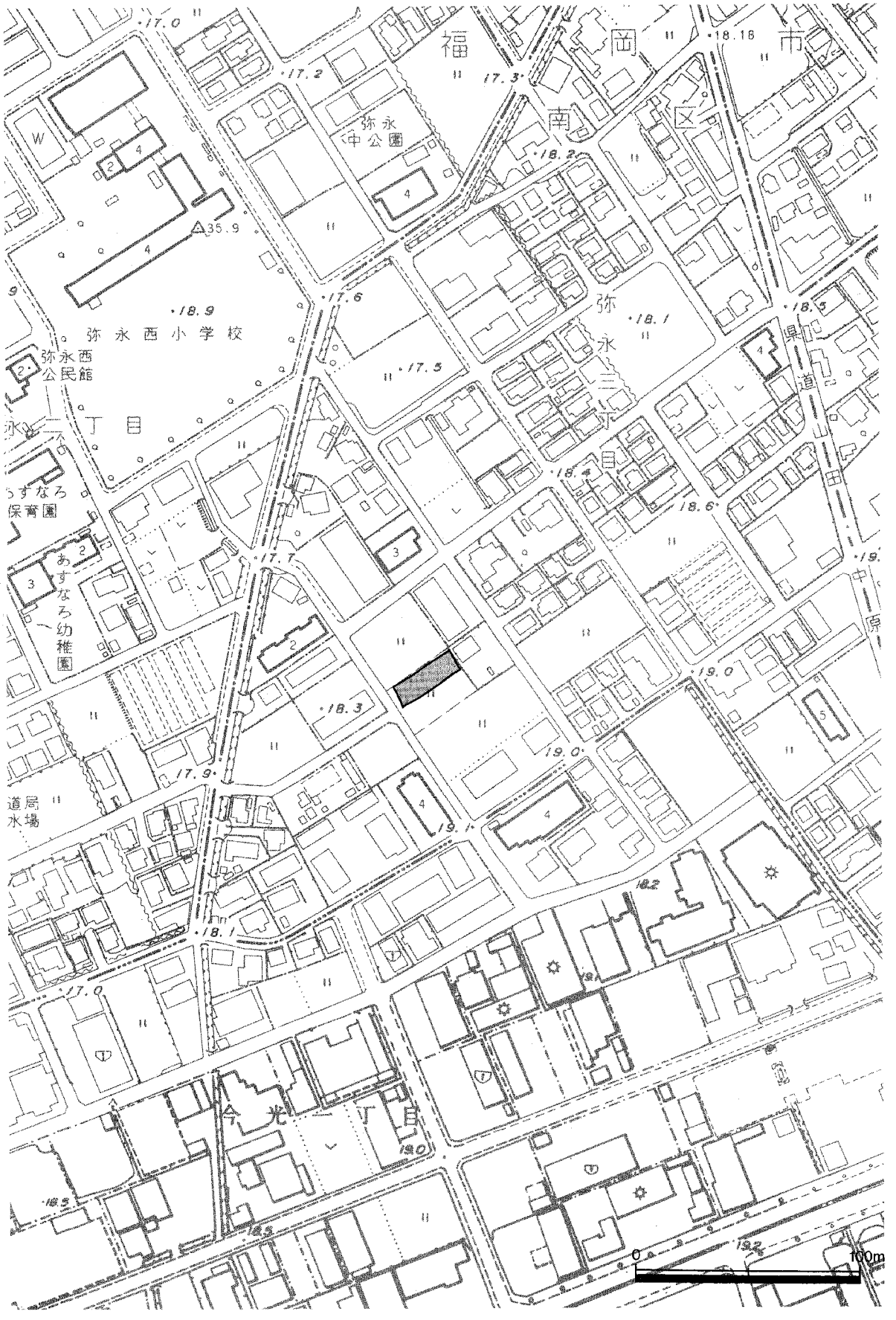
現地での発掘調査に当たっては、申請者である新飼秀朝様をはじめ関係者のみなさまにはご理解を得るとともに多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2．調査体制

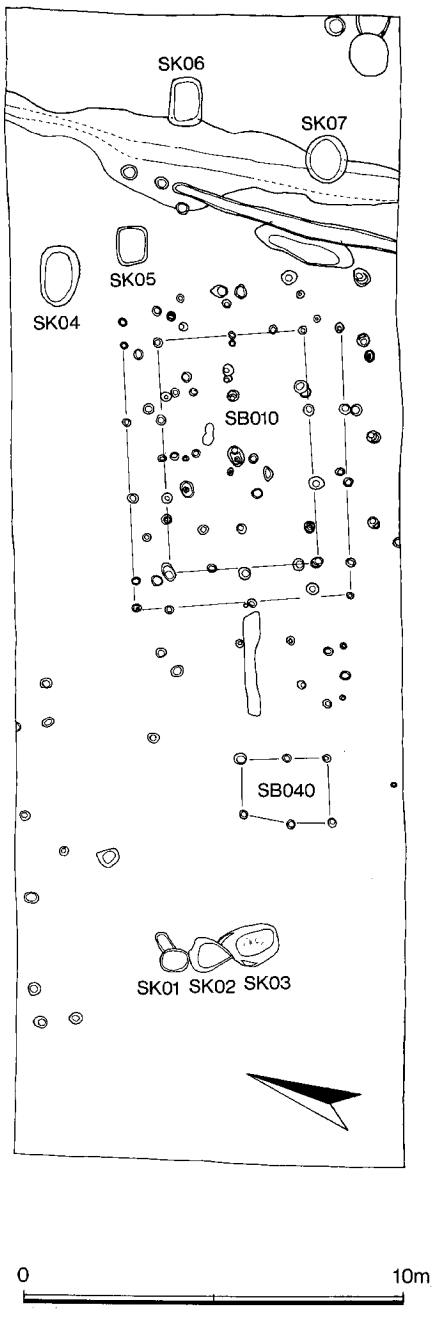
事業主体　新飼秀朝
調査総括　埋蔵文化財課長　山崎純男　　調査第２係長　力武卓治
調査庶務　文化財整備課　谷口真由美（前任）　　御手洗清（現任）
調査担当　調査第２係　榎本義嗣　　調査第１係　阿部泰之
整理作業　窪田慧　　黛早苗
調査作業　石橋テル子　金子國雄　金子澄子　清田厚巳　熊本義徳　坂田武　関哲也　杉村百合子
辻美佐江　米倉國弘



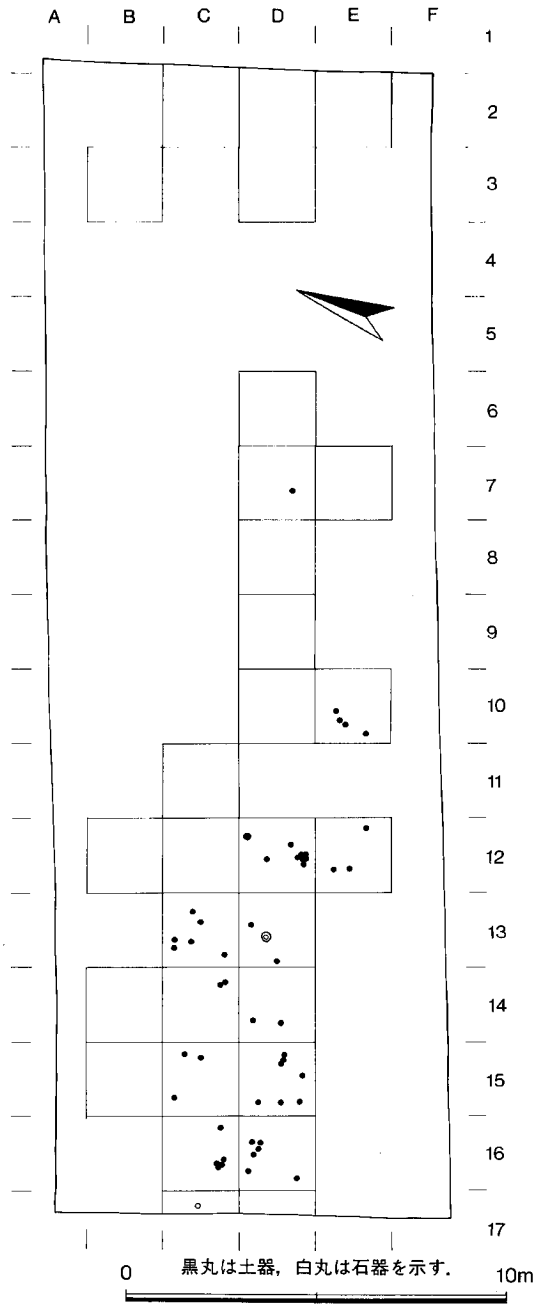
第１図　調査地点位置図（1/25000）



第2図　調査区位置図（1/2500）



第3図　調査区全体図（1/200）



第4図　調査区グリッド位置図（1/200）

二．調査の記録

1．調査概要

調査地周辺は新幹線博多南線の西側に当たり、今まで調査の手が入れられていなかった地域である。立地と環境で述べたとおり、本調査区は那珂川の中流域右岸、標高約18.5mを測る沖積微高地上に立地する。遺構は水田耕作土の直下30cm、黄褐色シルト質粘土上て検出される。包含層調査の際の土層断面では包含層が東側ほど厚く堆積している状況が観察され、調査区中央部で消滅する。このことから、本調査区中央部に微高地のピークが存在すると考えられる。

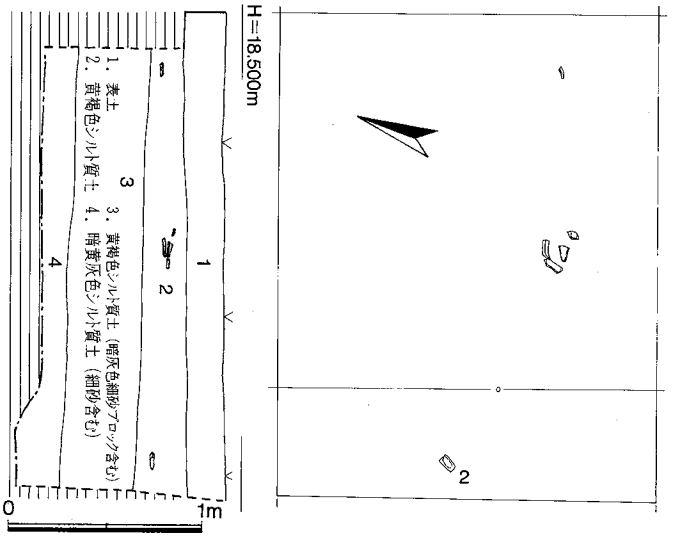
検出した遺構は中世初期（平安時代末）の掘立柱建物２棟・土坑７基・溝３条・柱穴多数で、掘立柱建物ＳＢ010は南・北・西側の３面に庇を持つ２×３間の建物である。

出土した遺物はコンテナ２箱程度であるが、土坑ＳＫ03より白磁Ｖ類椀および短刀が出土している。既往の調査で出土した弥生・古墳時代の遺物は全く出土していない。

本調査区の遺構検出面であるシルト質粘土からは遺構検出作業時より縄文土器片が出土していたため、調査区内に２×２ｍのグリッドを設定し掘り下げをおこなったところ、縄文晩期の粗製浅鉢・蛇紋岩製磨製石斧・黒曜石剥片等が出土し、黄褐色シルトが縄文晩期の包含層であることを確認した。先述の通り、この層は西側ほど浅く、西半には達していない。それより下の層に遺物は含まれないため、縄文期の遺物の分布は調査区東半に限定される。また、Ｄ－13グリッドで中世の遺構面から－５ｍのレベルでピット１基を検出している。埋土の色調・周囲の出土遺物から縄文晩期に遡るものと思われる。当該期のものと判断される遺構はこれのみである。

２．縄文時代の調査

調査区における遺構検出時から、遺構検出面である黄褐色シルト質粘土中より縄文土器の細片が出土したため、調査区内に縄文時代に属する遺物が包含されている可能性が高いと判断された。このため上面の遺構掘削および作図が終了した後、遺構が少なく削平が比較的進んでいない部分を中心に一辺2m四方のグリッドを設定し、20cmのセクションを残し土層観察を行いつつ掘削を行った。

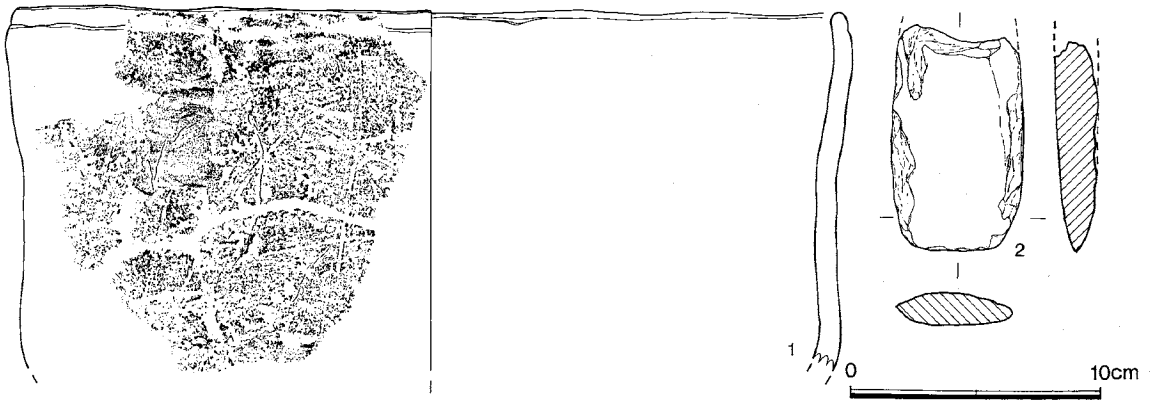


第５図　C-16グリッド実測図（1/40）

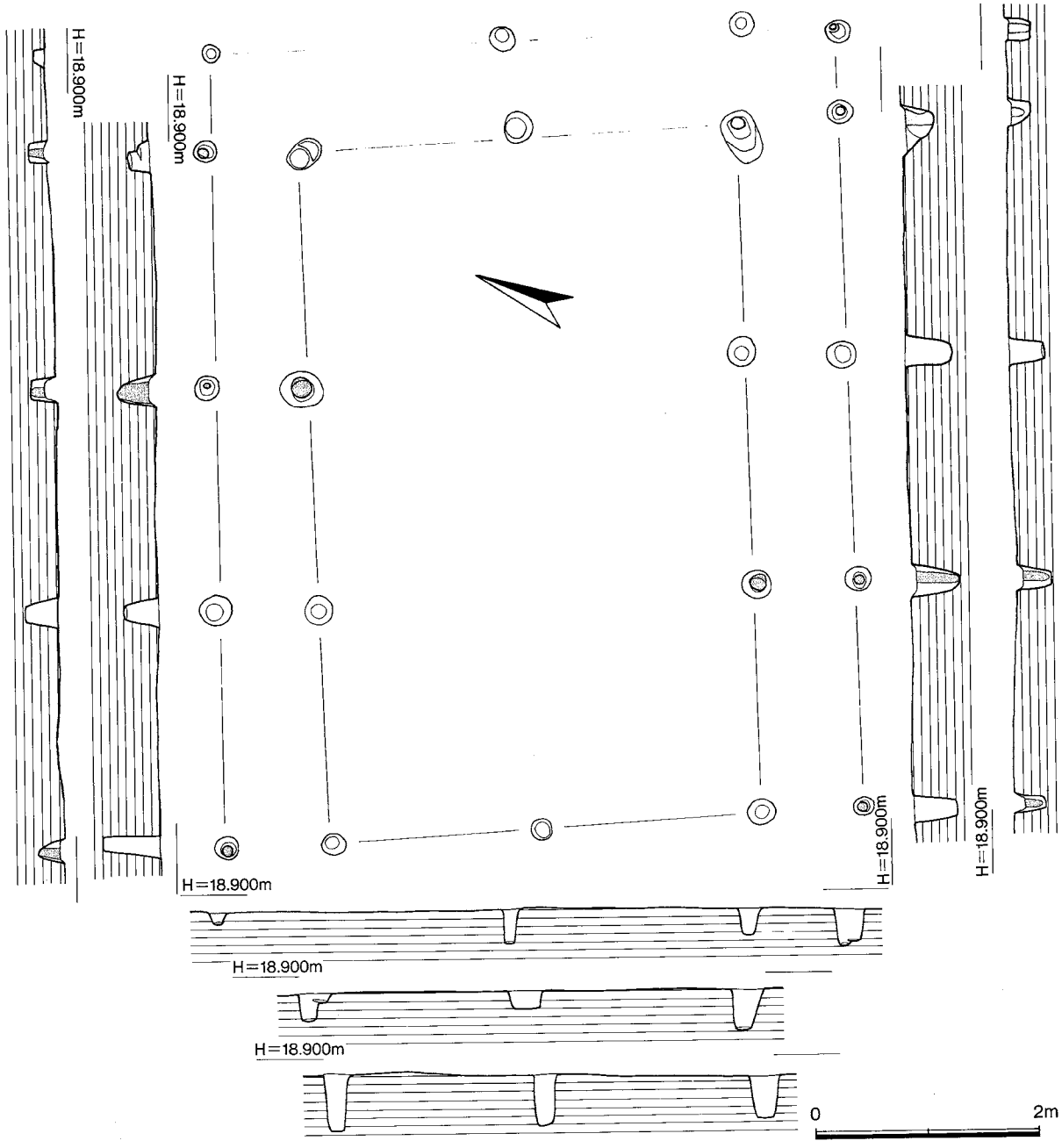
調査区内の層序は、まず表土直下に黄褐色シルト質土を検出する。下層からの遺物の出土はなく、この層が遺物包含層と判断した。下層には暗灰色土ブロックが混じる同質の層が入る。さらにその下層は暗灰色シルト質土となり、漸移的に細砂～粗砂へと変化する。

遺構と遺物

D-13グリッドにてピット状の遺構を検出した。中世の遺構検出面より5cm掘



第６図　グリッド出土遺物実測図（1/3）



第7図　SB010実測図（1/60）

り下げたレベルで検出でき、長径25cm・短径20cm・深さ12cmのほぼ円形を呈する。埋土は暗黄褐色シルト質土で検出面よりわずかに色調が鈍い。土質に差異はない。

出土遺物（第5図）　1は粗製の深鉢である。口径は復元で31.4cmを測る。内・外両面に条痕が残る。2は蛇紋岩製磨製石斧である。頂部を欠損し身部幅は5.2cmを測る。

3．中世の調査

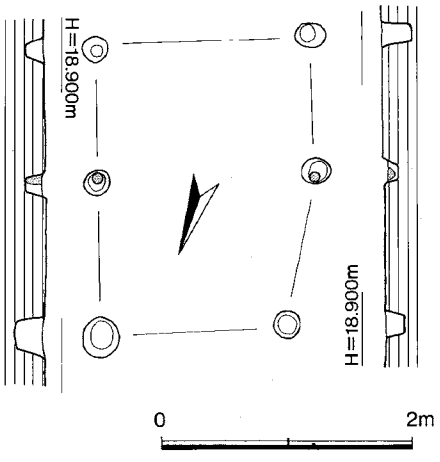
掘立柱建物（SB）

2棟検出している。調査区中央に2間×3間・西よりに1間×2間の建物が復元できる。長軸を直交させており同時期と思われるが、西側の建物以西にはピットが検出されず、建物は微高地の中央部に集中して建てられている。柱穴からは遺物の出土はなく、周囲のピットの遺物から時期は11世紀末

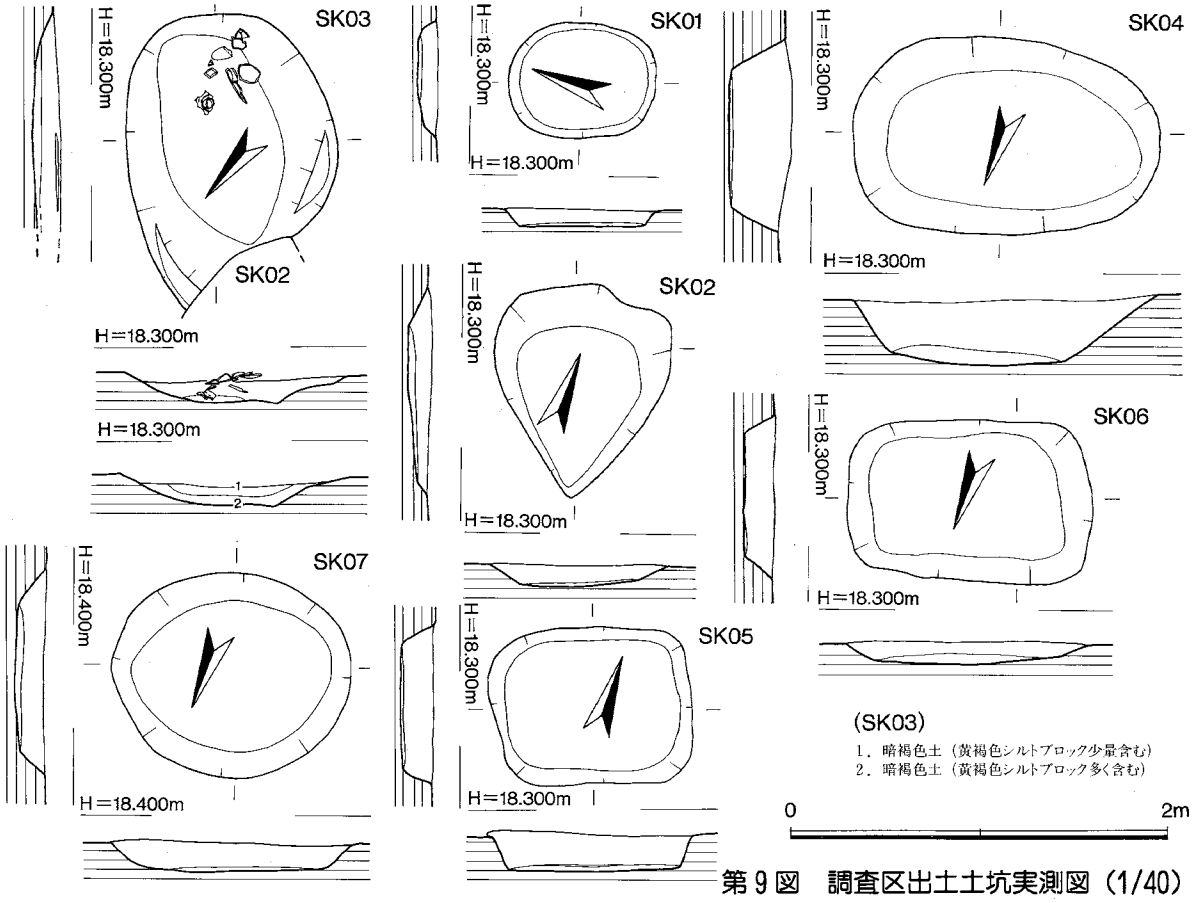
～12世紀前半と思われる。

SB010（第６図）　２間×３間の掘立柱建物である。主軸を東西にとり24°西偏する。北・東・南に庇を持つ。柱穴は25～40cmの円形を呈し柱間は桁行・梁行ともに2.1～2.2mを測る。柱痕は直径20cm前後を測る。埋土は暗茶褐色土である。遺物は柱穴内より土師器・瓦器の細片が出土したが図化しうるものはなかった。

SB040（第７図）　調査区西側にて検出した。１間×２間の掘立柱建物である。主軸を南北にとり20°西偏する。柱穴は18～30cmの円形を呈し柱間は北端の梁間が短いが桁行1.3m・梁行1.7mを測る。柱痕は６～10cmを測る。埋土は暗茶褐色土である。遺物は柱穴内より土師器の細片が出土したが図示しうるものはなかった。



第８図　SB040実測図（1/60）

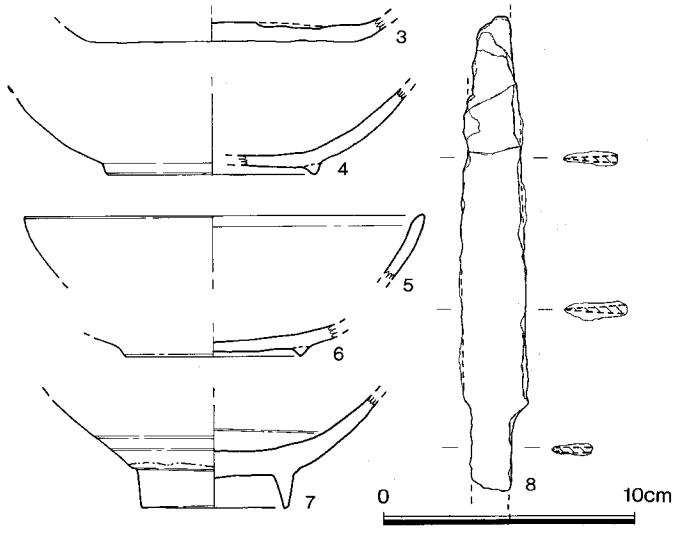


第９図　調査区出土土坑実測図（1/40）

土坑（SK）　７基検出している。SK02・03をのぞく土坑は長軸を互いにほぼ並行・直交させ、SB010の主軸に方向をあわせている。全ての土坑は浅く、削平を受けており、遺物の出土もSK02・03から土師皿・瓦器・白磁椀が出土した以外はほとんどなかった。

SK01（第８図）　調査区西半にて検出した。SK02に接する。平面形は楕円形を呈し長径70cm・短径60cm・深さ8cmを測る。埋土は暗灰色土である。遺物は出土しなかった。

SK02（第８図）　調査区西半にて検出した。SK01に接する。平面形は不整で長軸長1.5m・短軸長0.9m・深さ12cmを測る。埋土は黒褐色土である。土師皿・瓦器椀が出土した。



第10図　土坑出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第10図）　**3**は土師皿の底部である。底径は復元で9.4cmを測る。外底面に板状圧痕が残る。**4**は瓦器椀である。底径は復元で8.2cmを測る。内面はほとんど燻しがかからない。

SK03（第8図）　調査区西半にて検出した。SK02に切られる。平面形は不整な楕円形を呈すると思われ長径1.4m以上・短径1.1m・深さ16cmを測る。埋土は黒褐色土である。底面から浮いた状態で土師器・瓦器・白磁椀・鉄製短刀が出土した。

出土遺物（第9図）　**5**は瓦器椀口縁部の小片である。口径は復元で14.6cmを測る。口縁の周囲にのみ燻しがかかる。**6**は瓦器椀底部の小片である。底径は復元で7.0cmを測る。**7**は白磁Ⅴ類椀である。底径は5.8cmを測る。外面に2条・内面に1条の凹線が巡る。透明感のない暗白色の釉が施される。**7**は短刀である。残存長19.2cm・刃部最大幅2.7cmを測る。刃部断面は長い二等辺三角形を呈する。

SK04（第8図）　調査区東側にて検出した。平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径1.6m・短径1.0m・深さ0.4mを測る。埋土は暗灰色土で黄褐色シルトブロックを多く含む。遺物は出土しなかった。

SK05（第8図）　調査区東側にて検出した。平面形は隅丸長方形で長軸長1.1m・短軸長0.8m・深さ0.2mを測る。埋土は暗灰色土で底面ははっきりしない。遺物は出土しなかった。

SK06（第8図）　調査区東側にて検出した。平面形は東西に長い隅丸長方形を呈する。長軸長1.3m・短軸長0.8m・深さ16cmを測る。埋土は暗灰色土で直径2mm程度の砂粒が混じる。

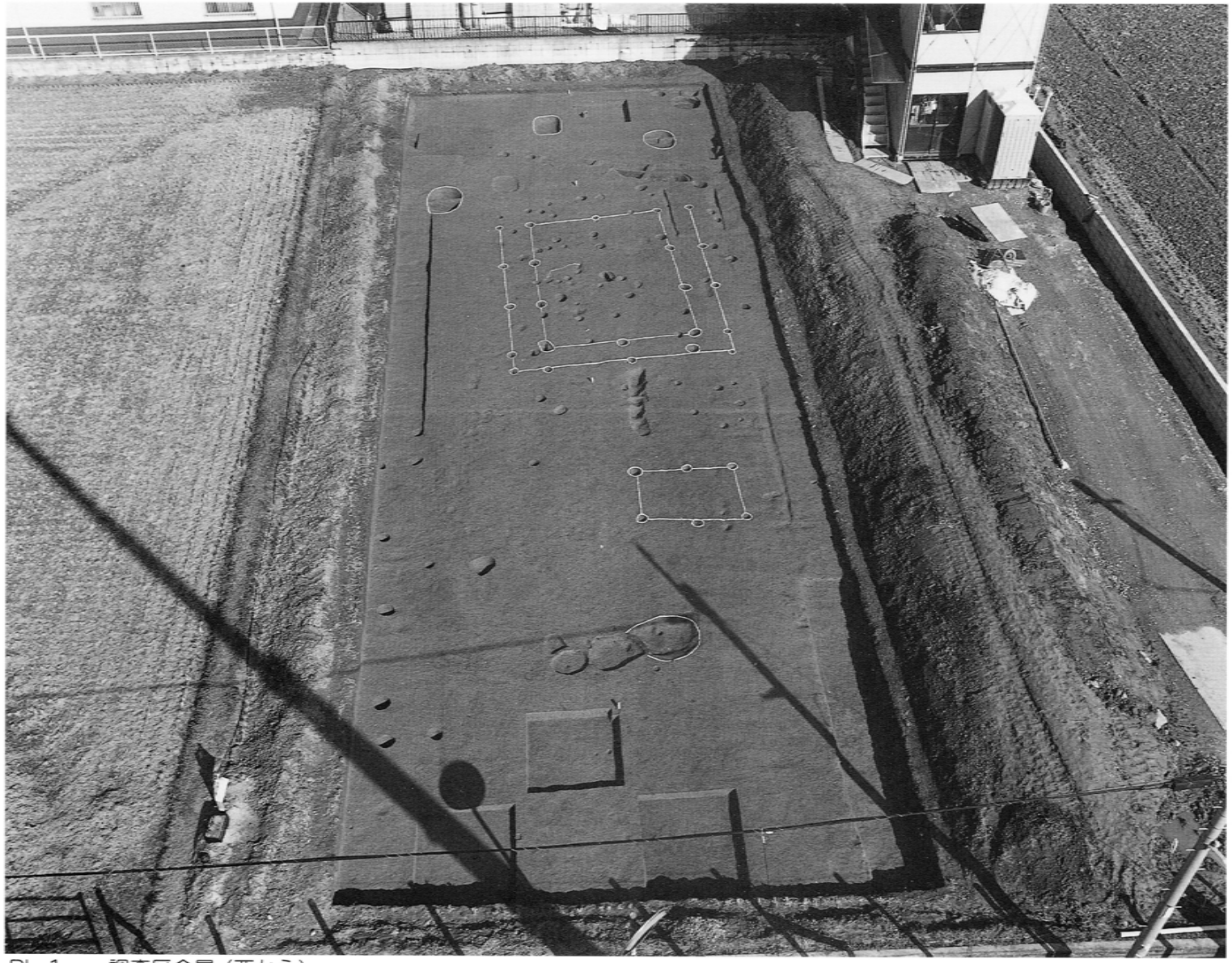
SK07（第8図）　調査区東側にて検出した。平面形は東西に長軸をとる楕円形で長軸長1.3m・短軸長1.0m・深さ12cmを測る。埋土は暗灰色土で直径3mm程度の砂粒を含む。

その他の遺構

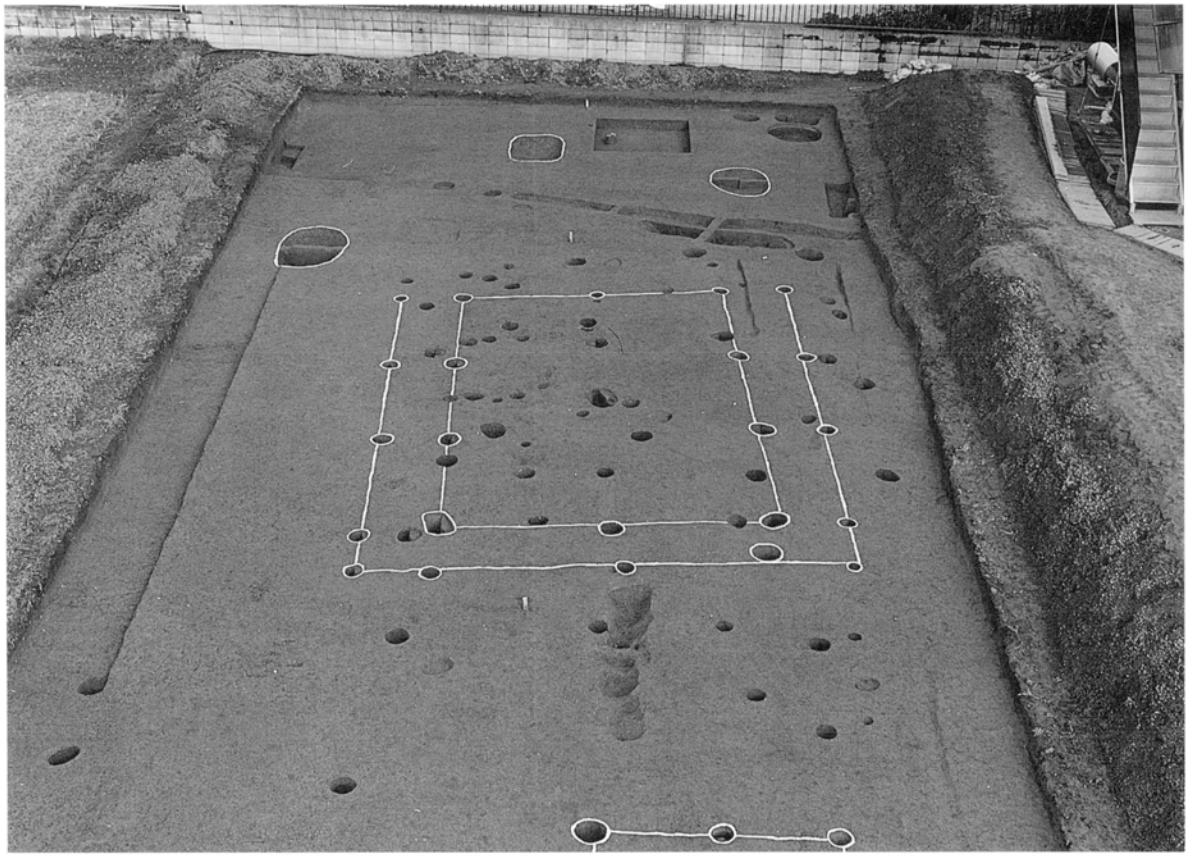
以上の遺構の他に南北にのびる溝状の堀込み2条を検出した。両方とも平面形が不整で断面は逆台形を呈し、埋土は暗灰色土で直径3mm程度の砂粒を含んでいる。遺物は出土していない。また調査区東端部に自然流路と考えられる不整形な溝が南北に走っている。遺構は全てこの流路を切っている。遺物は出土しなかった。

三．小　結

以上で述べてきたように、今次調査区では那珂川中流域右岸に広がる縄文晩期の包含層・中世前期の集落跡を検出した。包含層からは粗製深鉢・磨製石斧が出土し、中世の検出遺構は2間×3間・1間×2間の掘立柱建物を含む柱穴群・土坑・溝状遺構である。土坑SK02・03から11世紀末～12世紀後半の遺物が出土しており、他の遺構からは遺物の出土はないがほぼ同時期の所産と思われる。微高地のピークと思われる部分に柱穴が集中しており、この部分が集落の中心部であったと思われる。このピークは南北にさらに延びており、遺構も調査区外に伸びていく可能性が高い。調査区内では当該期以降の遺物は出土しておらず、集落は短期間で廃絶したものと思われる。



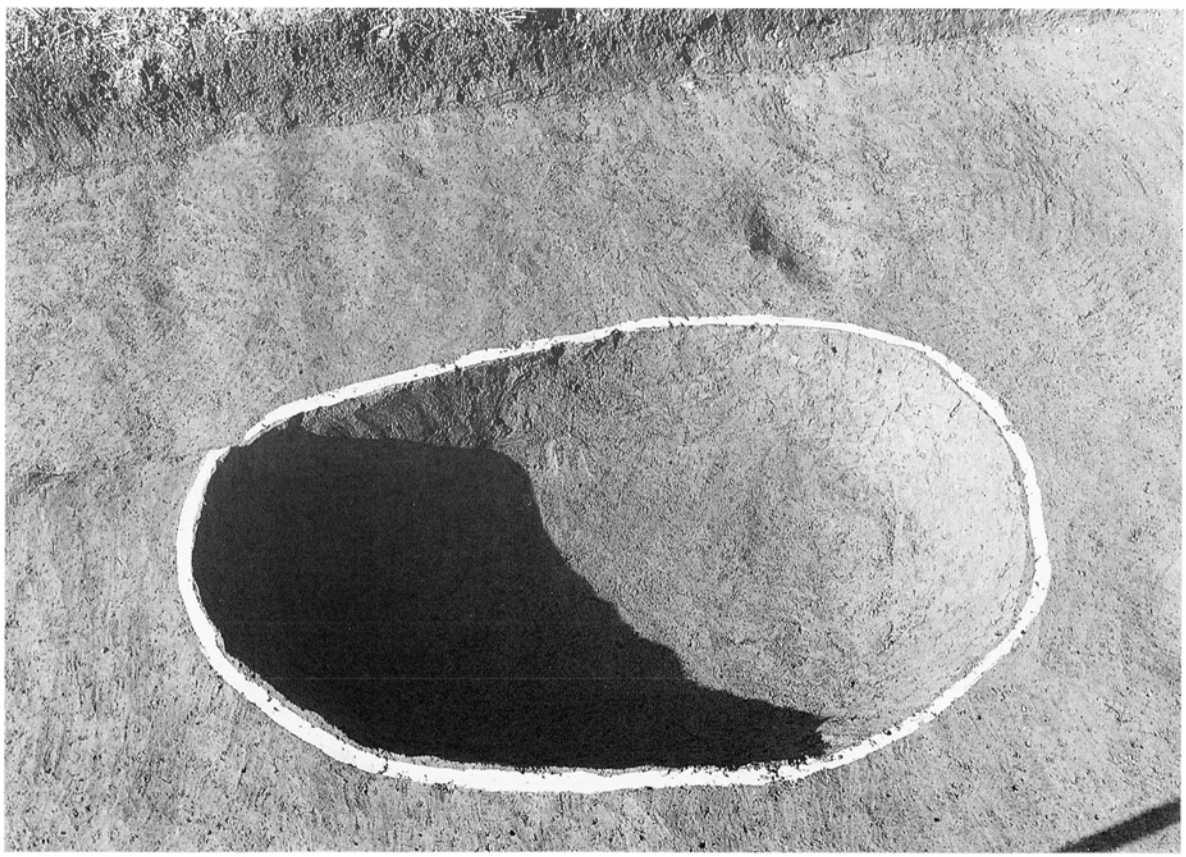
PL. 1　　調査区全景（西から）



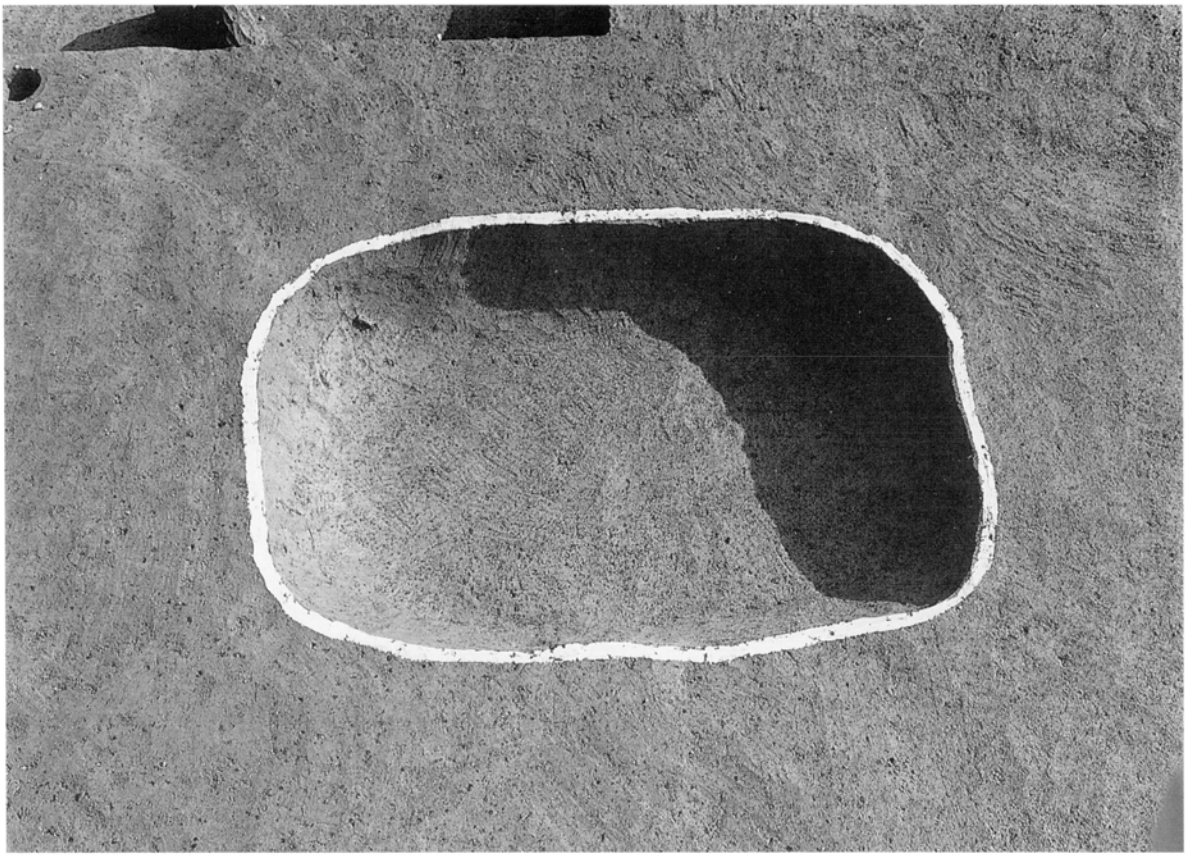
PL.2　SB010（西より）

PL.3　SB040（西より）

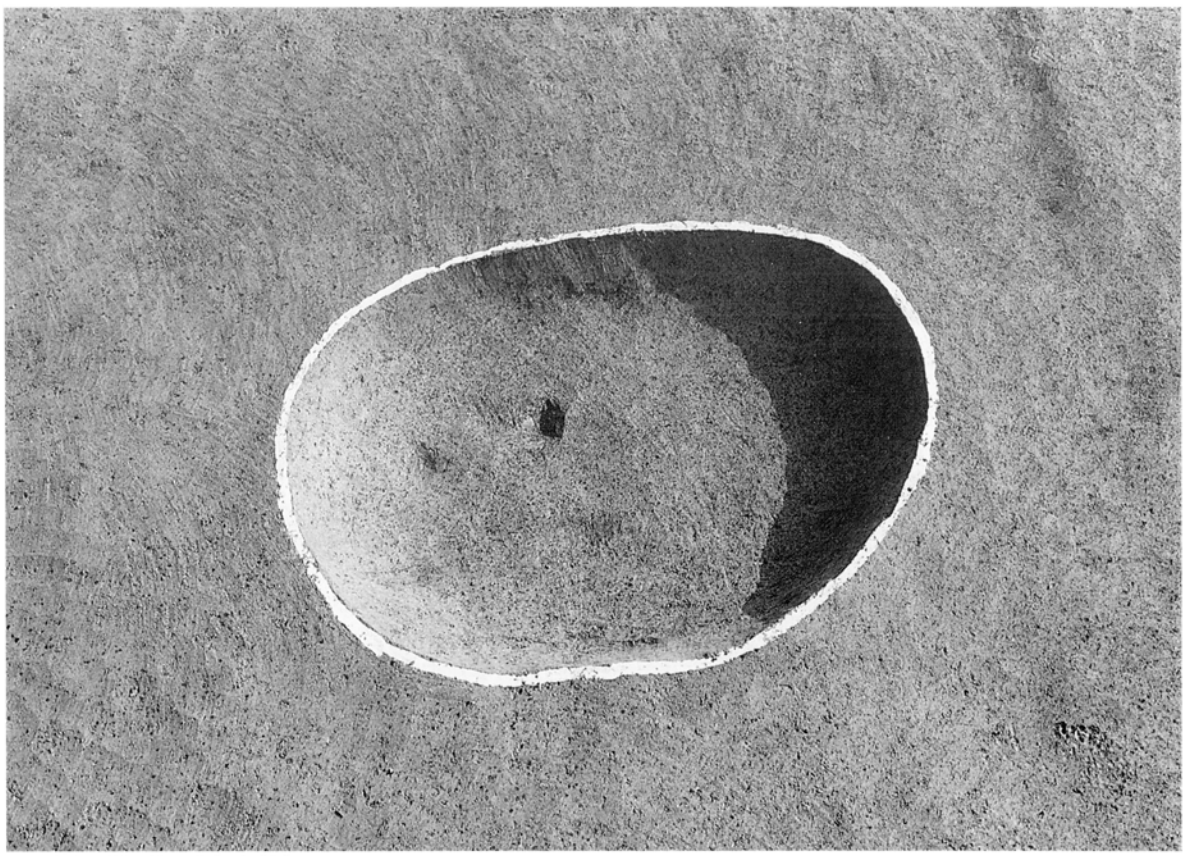
PL.4　SK03　遺物出土状況（東から）



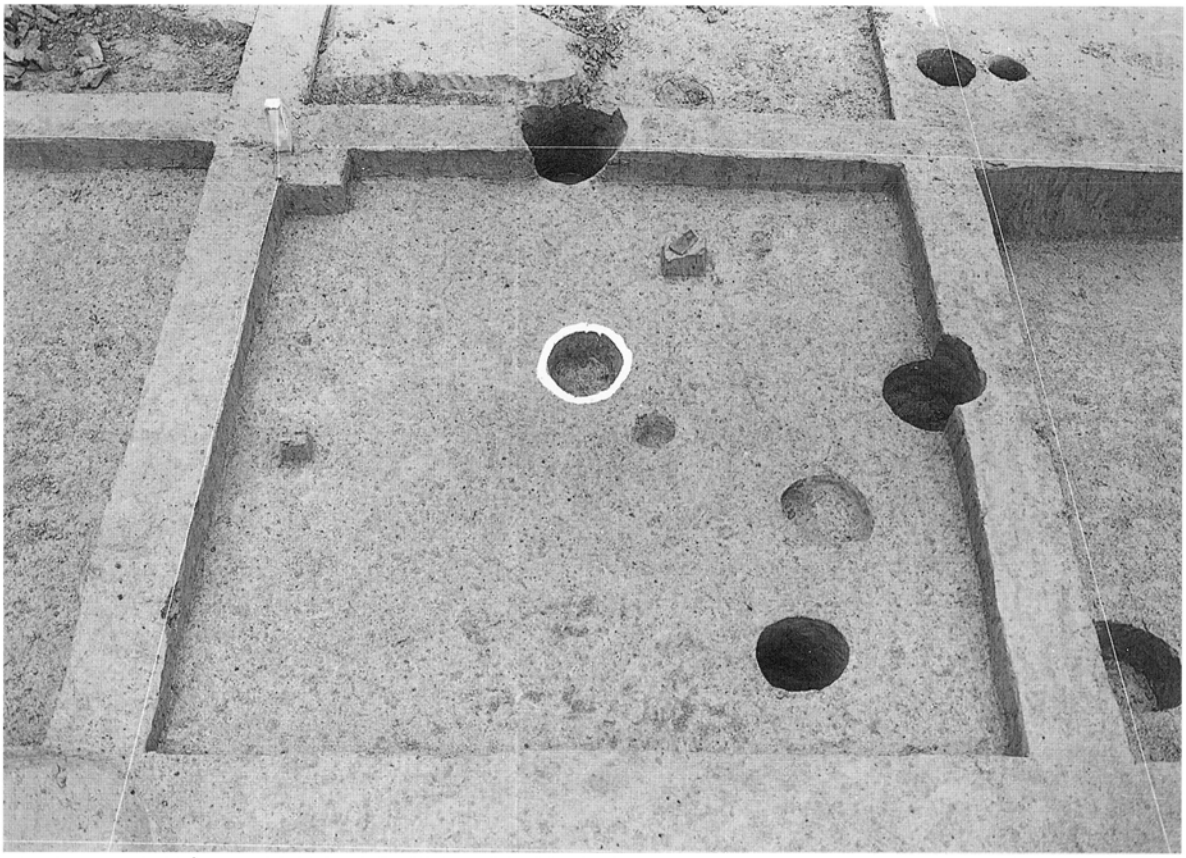
PL.5　SK04（南より）



PL.6　SK05（北より）



PL.7　SK07（南より）

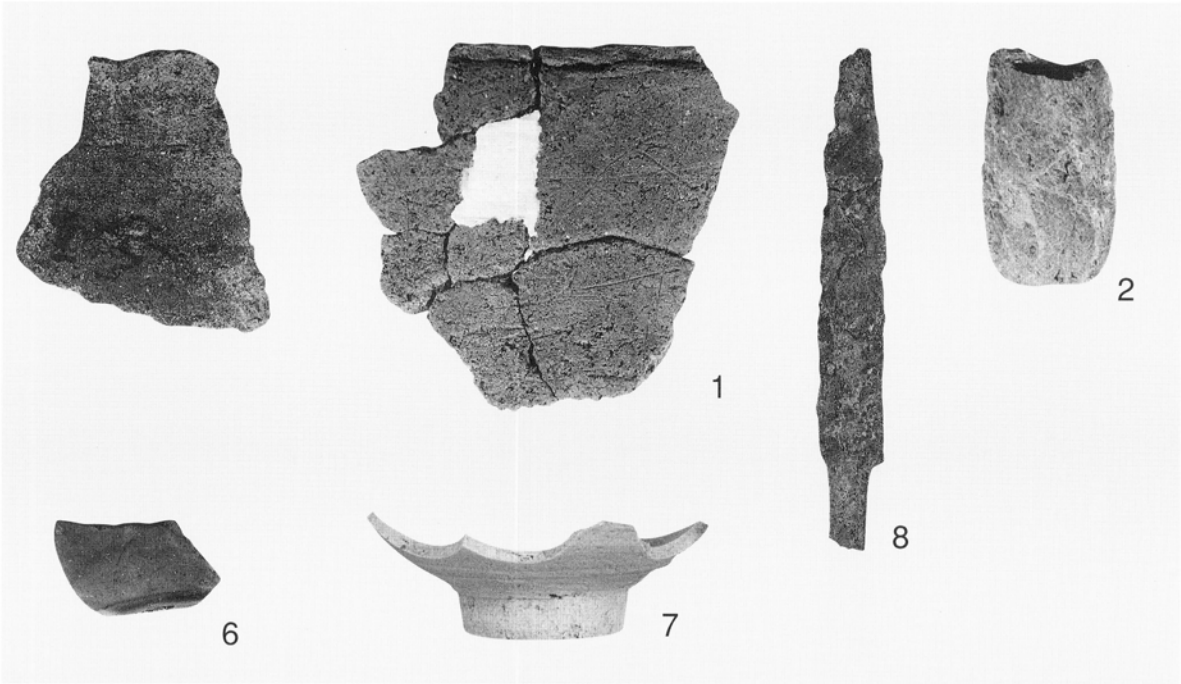


PL.8　D-13グリッド遺構・遺物検出状況（北より）

PL.9　C-16.17グリッド（南から）

PL.10　C-16.17グリッド土器出土状況（南より）

PL.11　C-16.17グリッド石斧出土状況（南より）



PL.12　出土遺物（1/3）

中南部(6)

— 桧原遺跡群第5次調査、曰佐遺跡群第2次調査、
警弥郷B遺跡群第4次調査報告 —

2001年（平成13年）3月30日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　セントラル印刷株式会社
福岡市中央区大宮1丁目5番13号